

告發スルヲ得

告發ヲ受ケタル官吏ハ第九拾三條ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

第九十八條 告訴告發ハ代人ニ委任シテ之ヲ爲スヲ得但第九拾六條ノ場合ハ此限ニ在ラス

無能力者ノ告訴ハ法律ニ定メタル代人之ヲ爲スモ其効アリトス

第九十九條 告訴告發ハ其願下ヲ爲シ又ハ其中立ヲ變更スルヲ得此場合ト雖モ第九拾六條ノ規則ニ從ヒ被告人ヨリ要償ノ訴ヲ受クルコトアル可シ

第二節 現行犯罪

第一百條 現行犯罪トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタル罪ヲ謂フ

第一百一條 重罪輕罪ニ付キ左ノ場合ハ現行犯ニ准ス

一 犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラル、時

二 兇器贓物其他犯人ト思料ス可キ物件ヲ携帯シタル時

三家宅内ニ於テ犯シタル罪ヲ檢證スル爲メ又ハ其犯人ト思料ス可キ者ヲ逮捕スル爲メ戸主ヨリ官吏ニ其處分ヲ求メタル時

第一百二條 司法警察官及ヒ巡查其職務ヲ行フニ當リ重罪輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル時ハ令狀又ハ命令ヲ待タズシテ被告人ヲ逮捕ス可シ

違警罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル時ハ被告人ノ氏名住所ヲ問ヒ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ告發ス可シ其氏名住所分明ナラス又ハ逃亡ノ恐アル者ハ違警罪裁判所ニ引致スルヲ得

第一百三條 巡查被告人ヲ逮捕シタル時ハ速ニ之ヲ司法警察官ニ

引致ス可シ  
其被告人ヲ受取リタル司法警察官ハ逮捕及ヒ告發ニ付テノ調書ヲ作ル可シ

第四百四條 司法警察官被告人ヲ逮捕シ又ハ之ヲ受取リタル時ハ假ニ被告人ノ訊問及ヒ檢證處分ヲ爲ス可シ

第四百五條 何人ニ限ラス重罪輕罪ノ現行犯アル場合ニ於テハ直チニ被告人ヲ逮捕スルヲ得

第四百六條 前條ノ場合ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ若シ引致スルヲ得サル時ハ自己ノ氏名職業住所及ヒ其逮捕ノ事由ヲ陳述シ假ニ之ヲ巡査ニ引渡スヲ得

被告人ヲ巡査ニ引渡シタル時ハ速ニ告訴又ハ告發ヲ爲ス可シ被告人又ハ巡査ハ逮捕ヲ爲シタル者ニ對シ共ニ官署ニ至ルヲ得

ヲ求ムルヲ得逮捕ヲ爲シタル者ハ正當ノ事由アルニ非サレハ其求ヲ拒ムヲ得ス

第二章 起訴

第一節 檢察官ノ起訴

第四百七條 檢事犯罪ノ搜查ヲ終リタル時ハ左ノ手續ヲ爲ス可シ

- 一 重罪ト思料シタル事件ニ付テハ豫審判事ニ豫審ヲ求ム可シ
- 二 輕罪ト思料シタル事件ニ付テハ其輕重難易ニ從ヒ豫審ヲ求メ又ハ直チニ輕罪裁判所ニ其訴ヲ爲ス可シ
- 三 違警罪ト思料シタル事件ニ付テハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ

之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ送致ス可シ

四 被告人ノ身分犯罪ノ種類又ハ場所ニ因リ其管轄ニ屬セサル者ト思料シタル事件ニ付テハ之ヲ管轄裁判所檢察官ニ送致ス可シ

被告事件罪ト爲ラス又ハ公訴受理ス可カラサル者ト思料シタル時ハ起訴ノ手續ヲ爲ス可カラス

第百八條 前條ノ場合ニ於テ被告事件告訴ニ係ル時ハ檢事ヨリ其處分ヲ被害者ニ通知ス可シ

第百九條 檢事豫審ヲ求ムル時ハ證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致シ且臨檢ス可キ場所逮捕ス可キ人名及ヒ原被ノ證人ト爲ル可キ者ヲ指示ス可シ

第二節 民事原告人ノ起訴

第百十條 重罪輕罪ノ被害者公訴ニ附帶シテ私訴ヲ爲サントスル時ハ告訴ト共ニ之ヲ申立テ又ハ告訴ヲ爲シタル後其旨ヲ豫審判事ニ申立ツ可シ

豫審判事直チニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ル可キノ申立ヲ受ケタル時ハ檢察官ノ起訴ナシト雖モ公訴私訴ヲ併セテ受理シ

タル者トス

豫審判事ハ何レノ場合ニ於テモ直チニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ル可キノ申立ヲ受ケタル時ハ其旨ヲ檢事ニ通知ス可シ

第百十一條 被害者ハ公訴ノ本案ニ付キ始審終審ノ裁判言渡アルマテ何人ニテモ私訴ヲ爲シ若クハ其要ムル所ヲ變更スルヲ得

又私訴ノ願下ヲ爲シタル後更ニ其中立ヲ爲シ若クハ其要ムル所ヲ變更スルヲ得

第百十二條 被害者ハ代人ニ委任シテ私訴ヲ爲シ又ハ其願下若クハ棄權ヲ爲スヲ得

被害者無能力ナル時ハ法律ニ定メタル代人之ヲ爲ス可シ

第三章 豫審

第百十三條 現行ノ重罪輕罪ヲ除クノ外豫審判事ハ前章ニ定メ

タル規則ニ從ヒ檢事又ハ民事原告人ノ請求アルニ非サレハ豫  
審ニ取掛ルコトヲ得ス此規則ニ背キタル時ハ其請求ヨリ以前ニ  
係ル手續ノ効ナカル可シ

第百十四條 豫審判事ハ重罪輕罪ニ付キ直チニ告訴又ハ告發ヲ  
受ケタル時ハ召喚狀ヲ以テ被告人ヲ呼出シ之ヲ訊問スルコトヲ  
得若シ引續キ取調ヲ爲ス可キ者ト思料シタル時ハ其事件ヲ檢  
事ニ送致ス事シ

第百十五條 豫審判事ハ告訴告發ノ事件急速ヲ要スル時ハ直チ  
ニ被告人ニ對シ勾引狀ヲ發シ又ハ訊問シタル後勾留狀ヲ發ス  
ルコトヲ得此場合ニ於テハ速ニ其旨ヲ檢事ニ通知シ且證憑及ヒ  
事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致ス可シ  
若シ其通知ヲ爲シタルヨリ一日内ニ檢事起訴ヲ爲サ、ル時ハ  
速ニ被告人ヲ放免ス可シ但後日起訴ヲ爲スノ妨礙ト爲ルコトナ

カル可シ

第百十六條 被告人所在ノ地ノ豫審判事ニテ告訴告發ヲ受ケ  
又ハ檢事ヨリ其送致ヲ受ケ被告事件急速ヲ要スル時ハ通常ノ  
規則ニ從ヒ被告人ノ訊問又ハ檢証處分ヲ爲シタル後証憑及ヒ  
事實參考ト爲ル可キ事物ヲ犯罪ノ地ノ豫審判事ニ送致ス可シ  
若シ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ勾留狀ヲ以  
テ被告人ヲ送致スルコトヲ得

第百十七條 檢事ハ豫審中何時ニテモ豫審判事ニ請求シテ訴訟  
書類ヲ檢閱スルコトヲ得但二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ  
又必要ナリトスル處分ニ付キ臨時其請求ヲ爲スコトヲ得

第一節 令狀

第百十八條 豫審判事ハ檢事又ハ民事原告人ノ起訴ニ因リ重罪  
輕罪ノ事件ヲ受理シタル時ハ被告人ニ對シ先ツ召喚狀ヲ發ス

可シ但召喚狀ノ送達ト被告人出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

召喚狀ニ因リ出廷シタル被告人ハ即時ニ之ヲ訊問ス可シ又遅クトモ出廷ノ日ヲ過クルコトヲ得ス

第一百十九條 豫審判事ハ召喚狀ヲ受ク可キ被告人其管轄地内ニ住居セサル時ハ訊問ス可キ條件ヲ明示シテ被告人所在ノ地ノ豫審判事ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第一百二十條 豫審判事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出廷セサル時ハ勾引狀ヲ發スルコトヲ得

第一百二十一條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ直チニ勾引狀ヲ發スルコトヲ得

- 一 被告人定リタル住所アラサル時
- 二 被告人罪証ヲ湮滅シ又ハ逃亡スルノ恐アル時

三 被告人未遂罪又ハ脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂ケントスルノ恐アル時

第一百二十二條 勾引狀執行ノ命ヲ受ケタル者ハ其令狀ヲ發シタル豫審判事ニ被告人ヲ引致ス可シ

勾引狀ヲ以テ引致シタル被告人ハ四十八時内ニ之ヲ訊問ス可シ若シ其時間ヲ經過スル時ハ勾留狀ヲ發スルニ非サレハ當然之ヲ釋放ス可シ

第一百二十三條 勾留狀ヲ發シタル前被告人既ニ豫審判事ノ管轄地外ニ在ル時ハ被告人ヨリ其所在ノ地ノ豫審判事ノ取調ヲ求ムルコトヲ得其求ルヲ受ケタル豫審判事ハ假ニ被告人ヲ勾留シ速ニ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ニ其旨ヲ通知スヘシ

第一百二十四條 前條ノ場合ニ於テ拘引狀ヲ發シタル豫審判事ハ被告人ヲ拘留シタル豫審判事ニ訊問ノ條件ヲ明示シテ其處分

ヲ囑託シ又ハ前ニ發シタル拘引狀ヲ以テ被告人ヲ送致ス可キ  
ヲ請求ス可シ

其囑託ヲ受ケタル豫審判事ハ被告人ヲ訊問シタル後其旨ヲ拘  
引狀ヲ發シタル豫審判事ニ通知シ其意見ヲ聽キ被告人ヲ放免  
シ又ハ前ニ發シタル拘引狀ヲ以テ管轄豫審判事ニ送致ス可キ  
ノ言渡ヲ爲ス可シ

第百二十五條 豫審判事ハ召喚狀又ハ拘引狀ヲ受ケタル被告人  
疾病其他正當ノ事由アリテ令狀ニ應スル能ハサル事ヲ証明シ  
タル時ハ被告人ノ所在ニ就テ之ヲ訊問スル事ヲ得若シ被告人  
其管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事ニ訊問ノ事ヲ囑  
託ス可シ

第百二十六條 拘留狀ハ被告人逃亡シ又ハ第百二十三條ノ場合  
ヲ除クノ外被告人ヲ訊問シタル後禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者

ト思料スルニ非サレハ之ヲ發スルヲ得ス

第百二十七條 豫審判事ハ拘留狀ヲ執行シタルヨリ十日ヲ過ク  
ル時ハ之ヲ収監狀ニ換ヘ若クハ第百十九條ノ規則ニ從ヒ被  
告人ヲ責付ス可シ

檢事ハ被告人ヲ責付スルヲナク更ニ十日間之ヲ拘留ス可キ  
ヲ豫審判事ニ求ムルヲ得

第百二十八條 收監狀ハ既ニ取掛リタル豫審ノ手續ヲ檢事ニ通  
知シ且其意見ヲ聽キタル後ニ非サレハ之ヲ發スルヲ得ス

第百二十九條 收監狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

- 一 被告事件ノ概畧及ヒ加重減輕ノ模様アル時ハ其概畧
- 二 其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條
- 三 檢察官ノ意見ヲ聽キタルヲ

第百三十條 總テ令狀ニハ被告事件及ヒ被告人ノ氏名職業住所

ヲ記載ス可シ但召喚狀ヲ除クノ外其氏名分明ナラサル時ハ容貌體格等ヲ明示ス可シ

又令狀ニハ之ヲ發スルノ年月日時ヲ記載シ豫審判事及ヒ書記署名捺印ス可シ

拘引狀拘留狀收監狀ハ巡查ヲシテ之ヲ執行セシム

第三百一十一條 召喚狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ書記局所屬ノ使丁ヲシテ被告人又ハ其住所ニ之ヲ送達セシム

第三百十二條 拘引狀拘留狀收監狀ハ日本全國ニ於テ之ヲ執行ス但時宜ニ因リ正本敷通ヲ作り巡查數人ニ分付スルヲ可シ

前項ノ令狀ヲ執行スルニハ被告人ニ正本ヲ示シ其謄本ヲ下付ス可シ此場合ニ於テハ第二拾三條第二項第四項ノ規則ニ從フ

第三百十三條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查ハ被告人其家宅若

クハ他人ノ家宅ニ潛匿シタリト思料シタル時ハ其地ノ戸長又其差支アル時ハ隣佑二名以上ノ立會ヲ求メ之ヲ搜索ス可シ  
巡查ハ被告人ヲ發見シタルト否トコ拘ハラス搜索調書ヲ作り立會人ト共ニ署名捺印ス可シ

家宅搜索ハ日出前日没後之ヲ爲スヲ得ス

第三百十四條 豫審判事ハ被告人他ノ管轄地内ニ潛匿シタルヲ知り又ハ潛匿シタリト思料シタル場合ニ於テ被告事件急速ヲ要スリ時ハ巡查ニ令狀ヲ帶行セシムルヲ得巡查ハ被告人所在ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ令狀ヲ示シテ即時ニ執行ヲ求ム可シ

第三百十五條 豫審判事ハ被告人所在ノ地ヲ覺知スルヲ能ハサル時ハ各控訴裁判所檢事長ニ被告人ノ人相書ヲ送達シ搜查及ヒ逮捕ヲ爲ス可キヲ請求スルヲ得

請求ヲ受ケタル檢事長ハ其管轄地内ノ檢事ヲシテ搜查及ヒ逮捕ノ處分ヲ爲サシム可シ

第三百二十六條 陸海軍在營ノ軍人軍属ニ對シ令狀ヲ發シタル時ハ所屬長官ニ令狀ヲ示ス可シ長官ハ已ムコトヲ得サル差支アルニ非サレハ本人ヲシテ速ニ令狀ニ應セシム可シ其行軍ノ際亦同シ

第三百二十七條 勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ハ速ニ其令狀ニ記載シタル監倉ニ引致ス可シ若シ其監倉ニ引致スルコト能ハサル時ハ假ニ最近ノ監倉ニ引致スル事ヲ得  
何レノ場合ニ於テモ監倉長ハ令狀ヲ檢閲シテ被告人ヲ受取リ其証書ヲ渡ス可シ

第三百二十八條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查ハ之ヲ執行シタルコト又執行スルコト能ハサル時ハ其事由ヲ令狀ノ正本ニ記載ス可シ

シ

巡查ハ令狀執行ニ關スル書類ヲ書記局ニ差出シ書記ハ其受取証書ヲ渡ス可シ

第三百二十九條 勾留狀又ハ收監狀ヲ受ク可キ被告人既ニ監倉若クハ獄舎ニ在ル時ハ書記ヨリ之ヲ本人ニ送達シ其旨ヲ正本及ヒ謄本ニ記載ス可シ

第四百十條 密室監禁ノ場合ヲ除クノ外被告人ハ監獄則ニ從ヒ官吏ノ立會ニ依リ其親屬故舊又ハ代言人ニ接見スルコトヲ得  
書翰書籍其他ノ書類ハ豫審判事ノ檢閲ヲ經タル後ニ非サレハ被告人ト外人ト之ヲ授受スルコトヲ許サス但豫審判事ハ其書類ヲ留置クコトヲ得

第四百十一條 豫審判事ハ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ニ非スト思料シタル時ハ豫審中何時ニテモ拘留狀又ハ收監狀



ヲ取消ス可シ但收監狀ヲ取消ス時ハ豫メ檢察官ノ意見ヲ聽ク可シ

第四百十二條 監倉ニハ刑法治罪法ヲ備置キ被告人ノ請求ニ從ヒ之ヲ貸與ス可シ

第二節 密室監禁

第四百十三條 豫審判事ハ豫審中事實發見ノ爲メ必要ナリト思料シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ勾留狀若クハ收監狀ヲ受ケタル被告人ヲ密室ニ監禁スルノ言渡ヲ爲ス事ヲ得

第四百十四條 密室監禁ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ一名毎ニ之ヲ別室ニ置キ豫審判事ノ允許ヲ得ルニ非サレハ他人ト接見シ又ハ書類貨幣其他ノ物品ヲ授受スルヲ許サス

食物飲料藥餌其他監倉ヨリ給ス可キ物品ト雖モ監倉長ノ特ニ

指名シタル者ヲシテ之ヲ給與セシム

第四百十五條 密室監禁ハ十日ヲ超過ス可カラス但十日毎ニ其言渡ヲ更改スルヲ得

言渡ヲ更改スル時ハ其事由ヲ裁判所長ニ報知ス可シ

豫審判事ハ十日間ニ少クトモ二度被告人ヲ訊問シ通常ノ規則ニ從ヒ調書ヲ作ル可シ

第三節 證據

第四百十六條 法律ニ於テハ被告事件ノ模様ニ因リ有罪ナルノ推測ヲ定ムルコトナシ

被告人ノ白狀官吏ノ檢証調書證據物件証人ノ陳述鑑定人ノ申立其他諸般ノ徵憑ハ裁判官ノ判定ニ任ス

第四百十七條 豫審判事ハ檢察官民事原告人被告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル證據徵憑ヲ

集取ス可シ

第四百十八條 豫審判事臨檢家宅搜索物件差押又ハ被告人證人ノ訊問ヲ爲スニハ書記ノ立會ヲ必要トス書記ハ調書ヲ作り豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

裁判所外ニ於テ急遽ノ際書記ノ立會ヲ得ルコト能ハサル時ハ立會人二名アルヲ要ス但監倉ニ就テ被告人ヲ訊問スル時ハ其監倉ノ官吏一名ヲシテ立會ハシム可シ  
前項ノ場合ニ於テハ豫審判事自ラ調書ヲ作り之ヲ讀聞カセ立會人ト共ニ署名捺印ス可シ

書記又ハ立會人ナクシテ爲シタル處分ハ其効ナカル可シ

第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質

第四百十九條 豫審判事ハ先ツ被告人ヲ訊問ス可シ但檢査ヲ爲シ又ハ証人ヲ訊問スルニ付キ急遽ヲ要スル時ハ此限ニ在ラス

第四百十條 豫審判事ハ被告人ヲシテ其罪ヲ白狀セシムル爲メ

恐嚇又ハ詐言ヲ用フ可カラス

第四百十一條 書記ハ訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ被告人ニ之ヲ讀聞カス可シ

豫審判事ハ被告人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ問ヒ署名捺印セシム可シ若シ署名印捺スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ  
書記ハ本條ノ式ヲ履行シタルコトヲ記載シ豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

第四百十二條 被告人其陳述ニ付キ變更増減ス可キコトヲ申立タル時ハ更ニ訊問ヲ爲シ前條ノ規則ニ從ヒ其訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ之ヲ讀聞カセ署名捺印ス可シ

第四百十三條 被告人ハ陳述書ノ謄本ヲ求ムルコトヲ得

第四百十四條 豫審判事ハ被告人ノ共犯ナルコト人違ナキコト其他

事實ヲ發見ス可キ一切ノ模様ヲ証スル爲メ必要ナリトスル時  
ハ被告人ト他ノ被告人証人又ハ其ノ他者ト對質セシムルヲ  
得

第百五十五條 書記ハ對質人ノ陳述及ヒ對質ニ因リ生スル一切  
ノ事件ヲ錄取シ對質人ニ其對質ニ關スル部分ヲ讀聞カス可シ  
第百五十一條第百五十二條ノ規則ハ對質ニ付テモ亦之ヲ適用  
ス

第百五十六條 被告人又ハ對質人聾ナル時ハ書面ヲ以テ問ヒ啞  
ナル時ハ書面ヲ以テ答ヘシム若シ聾者啞者文字ヲ知ラサル時  
ハ通事ヲ命ス可シ

被告人又ハ對質人國語ニ通セサル時亦同シ

第百五十七條 通事ハ正實ニ通譯ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ  
書記ハ通事ニ調書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム可シ

第百九拾二條第百九拾三條第百九拾四條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ  
適用ス

第五節 檢証及ヒ物件差押

第百五十八條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ  
重罪輕罪ノ犯所ニ臨ミ檢証ヲ爲ス可シ

又檢事ノ請求アリタル時ハ如何ナル場合ト雖モ臨檢ス可シ

第百五十九條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法日時及ヒ被告人ノ入  
違ナキヲ證明ス可キ模様ニ付キ調書ヲ作ル可シ

又被告人ノ利益ト爲ル可キ模様ヲモ記載ス可シ

第百六拾條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ發見シタル物件其出  
所及ヒ模様ニ因リ被告人ノ入違ナキヲ又ハ犯罪ノ模様ヲ知ル  
ニ足ル可シト思料シタル時ハ之ヲ差押ヘテ認印ヲ爲シ目錄ヲ  
作ル可シ但其物件ヲ監護シ又ハ遞送スルハ書記之ヲ擔任ス可

シ

第六十一條 豫審判事ハ臨檢家宅搜索物件差押ニ付キ其日ニ處分ヲ終ラサル時ハ場所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置ク事ヲ得

第六十二條 豫審判事ハ被告人ノ住所又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿スルノ疑アル者ノ住所ニ臨檢スル事ヲ得  
被告人又ハ物件ヲ藏匿スル者其住所ニ在ラサル時ハ同居ノ親屬若シ其在ラサル時ハ戸長ノ立會アルヲ要ス

第六十三條第三項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス  
第六十三條 被告人ハ臨檢家宅搜索ノ處分ニ立會ヒ又ハ代人ヲシテ立會ハシムルヲ得

若シ被告人拘留ヲ受ケタル時ハ自ラ立會フヲ得ス但豫審判事本人ノ立會ヲ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス

民事原告人及ヒ其代人ハ前ニ記載シタル處分ニ立會フヲ得但豫審判事ハ其立會ノ爲メ豫審ヲ遅延ス可カラス

第六十四條 家宅搜索ノ場合ニ於テ豫審判事ハ第六十條ノ規則ニ從ヒ物件ヲ差押フ可シ

物件ヲ差押ヘタル時ハ其目錄ノ謄本ヲ立會入ニ渡ス可シ

第六十五條 豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ立會ヒタルト否トヲ問ハス其物件ヲ被告人ニ示シ辨解ヲ爲サシム可シ  
其訊問及ヒ陳述ハ之ヲ調書ニ記載ス可シ

第六十六條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ証人ノ陳述ヲ聽ク  
一ヲ必要ナリトスル時ハ書記ノ立會ニ依リ各別ニ之ヲ訊問ス可シ

第六十七條 以下ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第六十七條 豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限

ヲス允許ヲ得スシテ其場所ニ出入スルヲ禁スルヲ得  
若シ其禁ヲ犯ス者アル時ハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ之  
ヲ留置スルヲ得

第六十八條 豫審判事ハ其管轄地内ト雖モ時宜ニ因リ臨檢家  
宅搜索ノ事ヲ其地ノ治安判事ニ囑託スルヲ得

第六十九條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ  
驛遞電信鐵道ノ官署諸會社ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ豫審  
ニ關係アル者ヨリ發シ若シシハ是等ノ者ニ對シ發シタル書類  
電報又ハ物件ヲ受取開披スルヲ得但受取証書ヲ渡ス可シ  
前項ノ書類物件不用ニ屬シタル時ハ其官署又ハ會社ニ還付ス  
可シ

第六節 証人訊問

第七十條 豫審判事ハ檢事民事原告人又ハ被告人ヨリ証人ト

シテ指名シタル者ヲ呼出ス可シ

原告証人被告証人ノ員數夥多ナル時ハ指名ノ順序ニ從ヒ又ハ  
最も事實ヲ知ル可シト思料シタル者輕罪事件ニ付テハ各五名  
重罪事件ニ付テハ各十名ヲ限リ先ツ之ヲ呼出ス可シ但事實發  
見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス  
又原被ノ指名セサル者ト雖モ豫審判事ノ職權ヲ以テ證人トシ  
テ之ヲ呼出スヲ得

第七十一條 証人ハ豫審判事ノ名ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ但其  
呼出狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ之ヲ送達ス可シ

若シ証人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ輕罪裁判所書記ニ  
送達ノ事ヲ囑託ス可シ

第七十二條 豫審判事ハ証人裁判所々在ノ地ニ住セサル時ハ  
其住所ノ地ノ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルヲ得

若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事又ハ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルコトヲ得

本條ノ場合ニ於テ呼出狀ハ囑託ヲ受ケタル判事ノ名ヲ以テ其裁判所ノ書記局ヨリ之ヲ送達ス可シ

第七十三條 呼出狀ニ証人ノ氏名住所及ヒ職業ヲ記載ス可シ

又出頭ノ日時場所及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡シ且拘引スルコトアル可キ旨ヲ記載ス可シ

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クモ廿四時ノ猶豫アル可シ

第七十四條 証人疾病公務其他正當ノ事故ニ因リ呼出ニ應スル能ハサルコトヲ証明シタル時ハ豫審判事其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ

第七十五條 証人ト爲ル可キ者陸海軍在營ノ軍人軍屬ナル時

ハ其所屬長官ヲ經由シテ呼出狀ヲ送達ス其長官ハ即時ニ出廷セシム可キコトヲ認可シ又ハ職務上已ムコトヲ得サル差支アル時ハ其事由ヲ付シテ出廷ノ延期ヲ豫審判事ニ請求ス可シ

第七十六條 豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合ヲ除クノ外証人呼出ニ應セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

豫審判事ハ其証人ニ對シ罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼出狀ヲ送達シ又ハ直チニ拘引狀ヲ發スルコトヲ得但其費用ハ証人ヲシテ之ヲ擔當セシム

若シ証人再度ノ呼出ニ應セサル時ハ二倍ノ罰金ヲ言渡シ且拘引狀ヲ發スルコトアル可シ

第七十七條 豫審判事ハ証人初度又ハ再度ノ呼出狀ヲ受ケサ

ルヲ其呼出狀第百七十三條ノ規則ニ背キタルコト又ハ豫知シ難キ正當ノ事故アリテ出廷スル能ハカリシコトヲ證明シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ

第百七十八條 証人呼出狀ニ因リ出廷シタル時ハ其呼出狀ヲ書記ニ差出ス可シ若シ之ヲ遺失シタル時ハ其人違ナキコトヲ證明スヘシ

第百七十九條 豫審判事ハ証人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏名年齢職業住所及ヒ第百八十一條ニ記載シタル者ナリヤ否ヲ問フ可シ

第百八十條 豫審判事ハ証人ヲシテ愛憎畏懼ノ心ナク正實ニ陳述ヲ爲ス可キコトヲ宣誓セシム可シ

豫審判事ハ証人宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

宣誓書ハ訴訟書類ニ添置ク可シ

第百八十一條 左ニ記載シタル者ハ証人ト爲ルコトヲ許サズ但事實參考ノ爲メ其陳述ヲ聽クコトヲ得

一 民事原告人

二 民事原告人及ヒ被告人ノ親屬

三 民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ是等ノ者ノ後見ヲ受クル者

四 民事原告人及ヒ被告人ノ雇人

第百八十二條 左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ

一 十六歳未満ノ幼者

二 知覺精神ノ不充分ナル者

三 瘖啞者

四 公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者

五重罪事件ニ付キ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケ又ハ重禁錮

ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ニ付キ公判ニ付セラレタル者

六現ニ陳述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ曾テ訴ヲ受ケ其証憑充分ナ  
ラサルニ因リ免訴ノ言渡ヲ受ケタル者

第百八十三條

証人宣誓ヲ肯セヌ又ハ宣誓シテ陳述ヲ肯セサル  
時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第百八十條ニ從ヒ罰金ヲ  
言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

醫師藥商穩婆又ハ代言人辯護人代書人公証人若クハ神官僧侶  
其身分職業ニ關スル秘密ノ事件ニ付キ委託ヲ受ケタル者ハ前  
項ノ例ニ在ラス

第百八十四條

証人ハ他ノ証人及ヒ被告人ト各別ニ之ヲ訊問ス  
可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ証人ト他ノ証人又  
ハ被告人ト對質セシムルヲ得

第百八十五條

豫審判事ハ証人ノ陳述ヲ確實ナラシムル爲メ必  
要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所又ハ其他ノ場所ニ同行スル  
ヲ得

若シ証人同行スルヲ肯セサル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從  
ヒ罰金ヲ言渡ス可シ

第百八十六條

第百五十六條第百五十七條ノ規則ハ証人ニ付テ  
モ亦之ヲ適用ス

第百八十七條

皇族又ハ勅任官証人ナル時ハ豫審判事書記ト共  
ニ其所在ニ就テ陳述ヲ聽ク可シ

第百八十八條

書記ハ証人ノ陳述ニ付キ各別ニ調書ヲ作ル可シ  
其調書ニハ証人宣誓ヲ爲シタルヲ又ハ爲サ、ルノ事由ヲ記載  
ス可シ

第百八十九條

豫審判事ハ証人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ知ラ



シムル爲メ書記ヲシテ調書ヲ讀聞カカシム可シ  
証人ハ其陳述ヲ變更増減セシムルヲ請求スルヲ得書記ハ其請求  
アリタルヲ及ヒ變更増減ノ條件ヲ調書ニ記載シ豫審判事及ヒ  
証人ト共ニ署名捺印ス可シ若シ証人署名捺印スル事能ハサル  
時ハ其旨ヲ附記ス可シ

第百九十條 証人ハ即時ニ出廷ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルヲ  
得

若シ日稼ヲ以テ生業トスル者ナル時ハ旅費日當ノ外日稼高ニ  
等シキ償金ヲ要ムルヲ得

本條ノ場合ニ於テハ豫審判事其金額ヲ定メ之ヲ言渡ス可シ

第七節 鑑定

第百九十一條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナラ  
シムル爲メ鑑定人ヲ必要ナリトスル時ハ學術職業ニ因リ鑑定

スルヲ得可キ者一名又ハ數名ヲシテ鑑定ヲ爲サシム可シ

第百九十二條 鑑定人ハ書記局ヨリ呼出狀ヲ以テ之ヲ呼出ス可  
シ其呼出狀ニハ犯罪事件ニ付キ鑑定ヲ命スルヲ及ヒ呼出ニ應  
セサル時ハ罰金ヲ言渡ス可キヲ記載ス可シ

鑑定人呼出ニ應セサル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從ヒ處分ス  
可シ但勾引狀ヲ發スルヲ得ス

第百七十七條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第百九十三條 鑑定人ハ正實ニ鑑定ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ  
其宣誓ハ第百八十條ノ式ニ從フ

書記ハ鑑定人ノ宣誓シタルヲ鑑定命令書ノ紙尾ニ記載シ之  
ニ宣誓書ヲ添置シ可シ

第百九十四條 鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ鑑定ヲ肯セキ  
ル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第百七十九條ニ從ヒ罰

金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

第九十五條 第八十一條 第八十二條ニ記載シタル者ニハ

鑑定ヲ命スルコトヲ得ス但急速ノ際正當ノ鑑定人ト爲ル可キ者

ナキ時ハ事實參考ノ爲メ鑑定ヲ命スルコトヲ得

第九十六條 豫審判事ハ成ル可ク鑑定ニ立會フ可シ

第九十七條 豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ

鑑定人ヲ増加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セシムルコトヲ得

第九十八條 鑑定人ハ鑑定書ヲ作り其手續結果及ヒ鑑定ヲ爲

シタル時間ヲ詳記ス可シ

若シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記載ス可シ

鑑定人意見ヲ異ニスル時ハ各自鑑定書ヲ作り又ハ各自ノ意見

ヲ一箇ノ鑑定書ニ記載ス可シ

第九十九條 鑑定人ハ鑑定書ニ年月日ヲ記載シ署名捺印及ヒ

契印ス可シ

又鑑定書ニハ豫審判事之ヲ受取リタル年月日ヲ記載シ書記ト

共ニ檢印ス可シ

鑑定書ハ鑑定命令書ニ添置ク可シ

外國人鑑定ヲ爲シタル時ハ其鑑定書ニ裁判所ヨリ命シタル通

事ノ作りタル譯本ヲ添置ク可シ

第二百條 鑑定人及ヒ通事ニハ旅費給料其他相當ノ費用ヲ給與

ス可シ

第八節 現行犯ノ豫審

第二百一條 豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルコトヲ

知りタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スル時ハ檢事ノ請求ヲ待

タス直チニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルコトヲ得

豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ合狀ヲ發シ其他此章ニ定メタル規則

ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲スヲ得

第二百二條 前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴ナシト雖モ豫審判  
事檢計調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタル者トス其調書ニハ  
現行ノ重罪又ハ輕罪ナルヲ記載ス可シ  
豫審判事ハ速ニ書類ヲ檢事ニ送致ス可シ但檢事ヨリ其豫審手  
續ヲ繼續ス可キ者ニ非サルノ意見アリト雖モ通常ノ規則ニ從  
ヒ之ヲ終結ス可シ

第二百三條 檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルヲ  
知リタル時ハ豫審判事ヲ待ツヲナク其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨  
檢シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スヲ得但罰金ノ言渡ヲ爲ス  
ヲ得ス

証人及ヒ鑑定人ノ陳述ハ宣誓ヲ用フルヲ得之ヲ聽ク可シ

第二百四條 前條ノ場合ニ於テ檢事ハ証憑書類ニ意見書ヲ添ヘ

述ニ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

第二百五條 第二百三條ニ於テ檢事ニ許シタル職務ハ司法警察  
官モ亦假ニ之ヲ行フヲ得但令狀ヲ發スルヲ得ス  
司法警察官ハ証憑書類ニ意見書ヲ添ヘ被告人ト共ニ述ニ之ヲ  
檢事ニ送致ス可シ

第二百六條 檢事被告人ヲ受取リタル時ハ二十四時内ニ之ヲ訊  
問シ調書ヲ作り勾留狀ヲ發スルト否トヲ問ハス一切ノ書類ニ  
請求ヲ添ヘ豫審判事ニ送致ス可シ  
若シ起訴ヲ爲ス可カラサル者ト認メタル時ハ直チニ被告人ヲ  
放免ス可シ

第二百七條 豫審判事ハ廿四時内ニ被告人ヲ訊問ス可シ此場合  
ニ於テハ檢事ノ發シタル拘留狀ヲ解キ又ハ之ヲ存スルヲ得  
第二百八條 豫審判事ハ檢事又ハ司法警察官ノ爲シタル手續ニ

付キ更ニ其取調ヲ爲スコトヲ得但檢事又ハ司法警察官ノ作リタル調書ハ之ヲ訴訟書類ニ添置ク可シ

第二百九條 檢事ハ輕罪ノ現行犯ニ係ル場合ニ於テ拘留狀ヲ發シタルト否トニ拘ハラス被告入ヲ訊問シタル後豫審ヲ求ムルニ及ハスト思料シタル時ハ直チニ輕罪裁判所ニ呼出スコトヲ得

第九節 保釋

第二百十條 豫審判事ハ豫審中拘留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告入ノ請求ニ因リ檢事ノ意見ヲ聽キ何時ニテモ呼出ニ應シ出廷ス可キノ証書ヲ差出サシメ保釋ヲ許スコトヲ得

被告人無能力ナル時ハ親屬又ハ代人ヨリ保釋ヲ求ムルコトヲ得

第二百十一條 前條ノ證書ハ書記局ニ差出ス可シ  
保釋中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ廿四時前ニ其報知ヲ爲ス可シ

第二百十二條 保釋ヲ許スニハ金圓ヲ以テ被告人ノ出廷ヲ保証セシムヘシ但豫審判事其金額ヲ定メ保釋ヲ許スノ言渡書ニ記載スヘシ

第二百十三條 保証ヲ爲スニハ被告人又ハ其他ノ者ヨリ保証金若クハ貯金預所又ハ銀行ノ預證書ヲ書記局ニ差出ス可シ  
又裁判所ノ管轄地内ニ住シ且充分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツ可キ保証書ヲ差出スコトヲ得

第二百十四條 保釋中被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時ハ保証金ノ全部又ハ幾分ヲ没入ス可シ

第二百十五條 保証金ヲ没入スルニハ檢事ノ意見ヲ聽キ豫審判事其言渡ヲ爲ス可シ

若シ他人ノ保証ニ係ル時ハ民事ノ規則ニ從ヒ之ヲ徵收ス可シ  
第二百十六條 豫審判事保証金ヲ没入シタル時ハ保釋ノ言渡ヲ

取消ス可シ

又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消スコトヲ必要ナリトスル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其言渡ヲ取消ス可シ

第二百十七條 豫審判事保証金ヲ没入シタル後免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ前ニ没入シタル金額ヲ還付ス可シ

第二百十八條 豫審判事免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ若シハ保釋ノ言渡ヲ取消シタル時ハ保証金ヲ還付ス可シ

第二百十九條 豫審判事ハ保釋ノ請求アルト否トテ問ハス檢事ノ意見ヲ聽キ被告人ヲ其親屬又ハ故舊ニ責付スルコトヲ得

第十節 豫審終結

第二百二十條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ストシ又ハ他ニ取調ヲ要スルコトナシト思料シタル時ハ豫審終結ノ處分ニ付キ檢事ノ意見ヲ求ムル爲メ一切ノ訴訟書類ヲ送致ス可シ  
檢事ハ訴訟書類ニ意見ヲ付シ三日内ニ之ヲ還付ス可シ

第二百二十一條 檢事ハ豫審充分ナラスト思料シタル時ハ其條件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルコトヲ得若シ豫審判事其請求ヲ肯セサル時ハ檢事訴訟書類ニ意見ヲ付シ二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ

第二百二十二條 豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハス後ニ記載シタル言渡ヲ以テ豫審ヲ終結ス可シ

第二百二十三條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非カルコトヲ認メタル時ハ其旨ヲ言渡ス可シ若シ拘留ヲ要スル者ト認メタル時ハ前ニ發シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發シ其事件ヲ檢事

ニ交付ス可シ

第二百二十四條

豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人拘留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

一 犯罪ノ證據充分ナラサル時

二 被告事件罪ト爲ラサル時

三公訴ノ期滿免除ト爲リタル時

四 確定裁判ヲ經タル時

五大赦アリタル時

六 法律ニ於テ其罪ヲ全免スル時

本條ノ場合ニ於テ被害者ハ民事裁判所ニ非サレハ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス

第二百二十五條

被告事件違警罪ナリト思料シタル時ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ且被告人拘留ヲ受ケタル時ハ釋放

ノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百二十六條

被告事件輕罪ナリト思料シタル時ハ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ

被告人拘留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

禁錮ノ刑ニ該ルヘキ者ト思料シタル時ハ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲スコトヲ得

若シ被告人未タ拘留ヲ受ケサル時ハ令狀ヲ發スルコトヲ得

第二百二十七條

被告事件重罪ナリト思料シタル時ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スヘシ若シ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲シタル時ハ其言渡ヲ取消スヘシ

重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニハ控訴裁判所檢事長ノ指揮アルマテ豫審ヲ爲シタル裁判所ノ監倉ニ被告人ヲ留置スヘキコトヲ

記載スヘシ

第二百二十八條 豫審終結ノ言渡ニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ付スヘシ

管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲スニハ其理由ヲ明示シ若シ被告人ヲ拘留スヘキ時ハ其理由ヲ明示スヘシ

免訴ノ言渡ヲ爲スニハ被告事件罪ト爲ラサルコト公訴受理スヘカラサルコト及ヒ其理由又犯罪ノ證據充分ナラサル時ハ其旨ヲ明示スヘシ

違警罪裁判所輕罪裁判所又ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スニハ犯罪ノ性質模樣證據ノ充分ナルコト及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ明示ス可シ

第二百二十九條 前條ノ言渡書ニハ第三百三十條ノ規則ニ從ヒ被告人ノ氏名等ヲ明示ス可シ

第二百三十條 書記ハ速ニ豫審終結ノ言渡書ノ謄本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ但是等ノ者ハ第二百四十六條以下ノ規則ニ從ヒ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スコトヲ得

第二百三十一條 被告人ヲ逮捕スルコト能ハサル場合ニ於テ重罪裁判所又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ其旨ヲ言渡書ニ記載ス可シ但被告人ハ現ニ拘留ヲ受クルニ非サレハ其言渡ニ對シ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

第二百三十二條 前條ノ場合ニ於テ檢事又ハ民事原告人ハ假ニ被告人ノ財産ヲ差押フ可キコトヲ民事裁判所ニ請求スルヲ得

第二百三十三條 豫審終結ノ言渡ヲ爲シタル時ハ豫審判事ヨリ速ニ其旨ヲ裁判所長ニ報告ス可シ  
又十五日毎ニ未決ノ豫審事件ニ付キ簡畧ナル報告書ヲ差出ス

可シ

第四章 豫審上訴

第二百三十四條 左ノ場合ニ於テハ檢事又ハ被告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スコトヲ得

一 管轄違ノ申立ヲ棄却シタル時

二 法律ニ背キ令狀ヲ發シ又ハ之ヲ發セサル時

三 法律ニ背キ保釋責付ヲ爲シ又ハ之ヲ爲サ、ル時

四 越權ノ處分アル時

民事原告人ハ私訴ニ付キ第四ノ場合ニ於テ故障ヲ爲スコトヲ得  
第二百三十五條 故障ヲ爲サントスル者ハ其裁判所ノ書記局ニ趣意書ヲ差出スヘシ

故障アリタル時ハ書記其趣意書ノ謄本ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得

故障ニ付テハ豫審處分ノ執行ヲ停止セス但保釋責付ヲ爲シタルニ付キ檢事ヨリ故障アリタル時ハ其執行ヲ停止ス

第二百三十六條 故障ハ其裁判所ノ會議局ニ於テ判事三名以上ニテ趣意書答辯書其他訴訟書類及ヒ檢事ノ意見書ニ依リ之ヲ判決ス可シ

會議局ノ言渡ハ速ニ之ヲ執行ス但其言渡ニ對シテハ豫審終結ノ言渡アリタル後上告ヲ爲スコトヲ得

第二百三十七條 左ノ場合ニ於テハ檢事被告人又ハ民事原告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ豫審判事ヲ忌避スルコトヲ得

一 豫審判事又ハ其配偶者ト被告人被害者又ハ是等ノ者ノ配偶者ト親屬ナル時

二 豫審判事被告人又ハ民事原告人ノ後見人ナル時

三 豫審判事又ハ其配偶者ニ於テ民事原告人被告人又ハ是等ノ



者ノ親屬ヨリ賄賂ニ非スト雖ヒ贈物ヲ收受シ若クハ聽許シタル時

第二百三十八條 忌避ノ申立ハ豫審判事ニ之ヲ爲ス可シ但其申立ヲ爲スニハ趣意書ニ通テ書記局ニ差出スヘシ  
書記ハ趣意書ヲ豫審判事ニ送致シ豫審判事ハ其送致ヲ受ケタルヨリ二十四時内ニ其申立ヲ認可シ又ハ棄却スルコト趣意書ノ紙尾ニ記載シ一通ヲ書記局ニ藏置シ一通ヲ本人ニ送達ス可シ

第二百三十九條 豫審判事忌避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ其申立人ヨリ故障ヲ爲スコト得  
會議局ニ於テハ故障ノ趣意書及ヒ豫審判事ノ辨明書ニ依リ判決ヲ爲スヘシ

第二百四十條 豫審判事ハ忌避ノ申立アリタル時又ハ其申立ヲ棄却シタルニ付キ故障アリタル時ト雖ヒ豫審ノ手續ヲ繼續ス可シ但終結ノ言渡ヲ爲スコト得ス  
又急速ヲ要セサル事件ニ付テハ豫審ノ手續ヲ停止スルコト得  
第二百四十一條 會議局ニ於テ忌避ニ付テノ故障ヲ棄却シタル時ハ上告ヲ爲スコト得但豫審終結ノ言渡アリタル後コト非ザレハ之ヲ爲スコト得ス

第二百四十二條 豫審判事自ラ第二百三十七條ニ定メタル理由アルコトヲ認メ又ハ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ會議局ニ回避ノ申立ヲ爲ス可シ

回避ノ申立ハ會議局ニ於テ之ヲ判決ス可シ  
第二百四十三條 會議局ニ於テ忌避又ハ回避ノ申立ヲ認可シタル時ハ裁判所長更ニ他ノ判事ヲシテ豫審ヲ爲サシム可シ  
其判事ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ前

豫審判事ノ爲シタル處分ト雖モ更ニ取調ヲ爲スヲ得

第二百四十四條 書記ハ自ラ回避シ又ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ會議局ニ申立テ之ヲ忌避スルヲ得

第二百四十五條 檢察官ハ被告人又ハ民事原告人ヨリ之ヲ忌避スルヲ得ス若シ自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ會議局ニ申立ツルヲ得

檢事補自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ檢事ニ申立ツ可シ檢事ハ其申立ヲ許否ス可シ

第二百四十六條 檢事ハ總テ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得

民事原告人ハ私訴ニ付キ越權ノ處分アルニ因リ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得  
被告人ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得

輕罪裁判所又ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シテハ豫審判事ノ管轄違越權又ハ其事件ヲ移ス可キ裁判所ノ管轄違ニ非カレハ故障ヲ爲スヲ得ス

第二百四十七條 故障ノ期限ハ一日ナリトス但言渡書ノ送達アリタルヨリ之ヲ起算ス

第二百四十八條 檢事民事原告人及ヒ被告人故障ヲ爲スニハ申立書ヲ書記局ニ差出ス可シ書記ハ速ニ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ

故障申立人ハ三日内ニ趣意書ヲ書記局ニ差出ス可シ  
書記ハ速ニ趣意書ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スヲ得

第二百四十九條 故障アリタル時ハ對手人ヨリ其判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ故障ヲ爲スヲ得

附帶ノ故障アリタル時ハ書記ヨリ其趣意書ヲ對手人ニ送達ス可シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得

第二百五十條 豫審終結ノ言渡ハ故障ノ期限内又故障アリタル時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止ス但被告人ヲ拘留シ又ハ保釋責付ヲ取消スノ言渡ハ其執行ヲ停止セス

第二百五十一條 書記ハ故障趣意書答辯書其他訴訟書類ヲ會議局ニ差出ス可シ

第二百五十二條 會議局ニ於テハ第二百三十六條ノ規則ニ從ヒ故障ノ判決ヲ爲ス可シ

豫審判事ノ言渡ヲ認可シタル時ハ其旨ヲ言渡シ若シ其全部又ハ幾分ヲ取消シタル時ハ全部ニ付キ更ニ言渡ヲ爲ス可シ又被告人ヲ保釋責付シ又ハ拘留スルノ言渡ヲ爲スコトヲ得

第二百五十三條 會議局ニ於テ必要ナリトスル時ハ判事一名ヲ

シテ更ニ豫審ヲ爲シ又ハ其指示スル所ノ條件ニ付キ更ニ取調ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可シ

第二百五十四條 會議局ニ於テ故障ノ取調中管轄違越權又ハ公訴受理ス可カラサルコトヲ發見シタル時ハ職權ヲ以テ豫審判事ノ言渡ヲ取消スコトヲ得

第二百五十五條 會議局ニ於テ故障ノ取調中共犯ノ起訴ヲ受ケサル者アルコト附帶ノ犯罪ニ付キ豫審ヲ受ケサル者アルコトヲ發見シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可シ  
檢事ハ意見書ヲ差出ス可シ  
會議局ニ於テハ報告書其他訴訟書類ニ依リ故障ト共ニ之ヲ判決ス可シ

第二百五十六條 故障ノ判決アリタル時ハ速ニ其言渡書ノ謄本

ヲ檢事民事原告人及ト被告人ニ送達ス可シ

第二百五十七條 檢事其他訴訟關係人ハ會議局ノ言渡ニ對シ上告ヲ爲スヲ得

第二百五十八條 被告人ニ送達ス可キ言渡書ニハ其言渡ニ對シ上訴スルヲ得可キヲ及ヒ其期限ヲ記載ス可シ其記載ナキ時ハ規則ニ從ヒ更ニ言渡書ノ送達アルマテ被告人上訴ノ權ヲ失フヲナカル可シ

第二百五十九條 第三百十一條ヨリ第三百十三條マテノ規則ハ豫審ノ上訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第二百六十條 重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事其言渡書ニ一切ノ書類ヲ添ヘ速ニ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致ス可シ

檢事長ハ一切ノ書類證據物件及ヒ被告人ヲ重罪裁判所ニ移ス

ノ處分ヲ檢事ニ命ス可シ

重罪裁判所以外ノ裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事速ニ其執行ヲ爲ス可シ

第二百六十一條 豫審ニ於テ被告人免訴ノ言渡ヲ受ケ其言渡確定シタル時ハ罪名ノ變更アルモ同一ノ事件ニ付キ更ニ訴ヲ受クルコトナカル可シ但新ナル証憑アル時ハ此限ニ在ラス新ナル証憑アル時ハ檢事ヨリ之ヲ會議局ニ差出シ會議局ニ於テハ其起訴ヲ許ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

第四編 公判

第一章 通則

第二百六十二條 訴訟事件ハ書記局ノ簿冊ニ登記シタル順序ニ從ヒ之ヲ公判ニ付ス可シ

裁判所長ハ未決拘留ノ日數ヲ減縮スル爲メ職權ヲ以テ其順序

ヲ變更スルヲ得

又重要ナル事由ノ爲メ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル時モ亦順序ヲ變更スルヲ得

第二百六十三條 重罪輕罪違警罪ノ訊問辯論及ヒ裁判言渡ハ之ヲ公行ス否ヲサル時ハ其言渡ノ効ナカル可シ

第二百六十四條 被告事件公安ヲ害シ又ハ猥褻ニ涉リ風俗ヲ害スルノ恐アル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訊問及ヒ辯論ノ傍聽ヲ禁スルヲ得其裁判言渡ヲ爲スニ當テハ傍聽ヲ許ス可シ

第二百六十五條 被告人ハ公廷ニ於テ身體ノ拘束ヲ受クルヲナシ但守卒ヲ置クコアル可シ

禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人疾病アルニ非スシテ出廷ヲ肯セサル時ハ之ヲ引致スルヲ得若シ出廷シテ辯論スルヲ肯

セサル時ハ對審トシテ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第二百六十六條 被告人ハ辯論ノ爲メ辯護人ヲ用フルヲ得辯護人ハ裁判所々屬ノ代官人中ヨリ之ヲ選任ス可シ但裁判所ノ允許ヲ得タル時ハ代官人ニ非サル者ト雖モ辯護人ト爲スヲ得

第二百六十七條 被告人公廷ニ於テ暴行又ハ喧嘩ヲ爲シ辯論ヲ妨礙スル時ハ裁判長ヨリ再度告戒ヲ爲シ仍ホ之ニ從ハサル時ハ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ被告人ヲ退廷セシメ若クハ拘留スルヲ得

前項ノ場合ニ於テハ對審トシテ引續キ辯論及ヒ裁判言渡ヲ爲スヲ得

若シ辯論二日ニ涉ル時ハ更ニ被告人ヲ出廷セシム可シ

第二百六十八條 被告人精神錯亂又ハ疾病ニ因リ出廷スルヲ能

ハサル時ハ痊癒ニ至ルマテ辯論ヲ停止ス  
 辯論ニ取掛リタル後被告人精神錯亂シタル時ハ其痊癒ノ後新  
 ニ辯論ヲ爲ス可シ其他ノ疾病ニ罹ル時ハ痊癒ノ後前ニ停止シ  
 タルヨリ以後ノ手續ヲ爲ス可シ但五日間辯論ヲ停止シ又ハ檢  
 察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル時ハ新ニ辯論ヲ爲ス可シ  
 若シ被告事件及ヒ法律ノ適用ニ付キ既ニ辯論ヲ終リタル時ハ  
 其痊癒ノ後更ニ取調爲スコトナク裁判言渡ヲ爲ス可シ  
 第二百六十九條 禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人公判ノ日時ニ  
 出廷セスト雖モ豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達シ  
 タルノ証アルニ非サレハ闕席裁判ヲ爲ス可カラズ  
 豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達スルコト能ハサル場  
 合ニ於テハ裁判所ニテ猶豫ノ期限ヲ定メ其期限内ニ被告人出  
 廷セサル時ハ闕席裁判ヲ爲ス可キノ告知書ヲ親屬若クハ戸長

ニ送達ス可シ

第二百七十條 闕席シタル被告人ニ付テハ辯護人ヲ用フルコト  
 許サス但其親屬故舊ハ被告人ノ出廷スルコト能ハサルノ事由ヲ  
 証明スルコトヲ得

裁判所ニ於テ其事由ヲ正當ナリトスル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽  
 キ裁判ヲ延期スルコトヲ得

第二百七十一條 被告人中ノ一名又ハ數名出廷セスト雖モ出廷  
 シタル者ニ付テハ通常ノ規則ニ從ヒ對審裁判ヲ爲ス可シ  
 第二百七十二條 裁判長ハ公廷ニ於テ諸般ノ取締ノ爲メ相當ノ  
 處置ヲ爲ス可シ

稱讚誹謗其他辯論ヲ妨礙スル者アル時ハ之ヲ制止シ又ハ退廷  
 セシムルコトヲ得

第二百七十三條 公廷ニ於テ輕罪違警罪ヲ犯シタル者アル時ハ

其身分ノ如何ニ拘ハラス裁判長ノ命令ニ因リ之ヲ取押ヘ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ裁判ヲ爲シ又ハ次ノ公判ニ付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

書記ハ犯罪ノ事件及ヒ裁判長ノ處分ニ付キ即時ニ調書ヲ作ル可シ

第二百七十四條 前條ノ場合ニ於テ違警罪裁判所ニテハ違警罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲シ輕罪ニ付キ始審ノ裁判ヲ爲ス可シ  
輕罪裁判所其他上等ノ裁判所ニテハ輕罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲ス可シ

第二百七十五條 公廷ニ於テ重罪ヲ犯シタル者アル時ハ裁判長被告人及ヒ証人ヲ訊問シ調書ヲ作り裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ通常ノ規則ニ從ヒ裁判スル爲メ豫審判事ニ送付スルノ言渡シヲ爲ス可シ

第二百七十六條 裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケサル事件ニ付キ裁判ヲ爲ス可カラズ但辯論ニ因リ發見シタル附帶ノ事件及ヒ公廷内ノ犯罪ニ付テハ此限ニ在ラス  
若シ附帶ノ事件ニ付キ豫審ヲ必要ナリトスル時ハ本案ノ裁判ヲ停止スルヲ得

第二百七十七條 檢察官被告人及ヒ民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ申立ヲ爲スヲ得  
裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ言渡ヲ爲スヲ得

第二百七十八條 裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ棄却シタル時ハ本案ノ裁判言渡ヲ待タズ直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得  
此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百七十九條 檢察官其他訴訟關係人ハ第二百三十七條ニ定  
 メタル原由アル時ハ違警罪裁判所輕罪裁判所控訴裁判所又ハ  
 重罪裁判所ノ裁判官及ヒ書記ニ對シ忌避ノ申立ヲ爲スコトヲ得  
 豫審ヲ爲シタル裁判官其公判ニ干預シ又ハ始審裁判ヲ爲シタ  
 ル裁判官其終審裁判ニ干預シタル時亦同シ

第二百八十條 忌避ノ申立ハ本案ノ裁判言渡ニ至ルマテ何時ニ  
 テモ之ヲ爲スコトヲ得

忌避ノ申立アリタル時ハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百八十一條 忌避又ハ回避ノ申立及ヒ其判決ヲ爲スニハ第  
 二百三十八條ヨリ第二百四十五條マテニ定メタル規則ニ從フ  
 第二百八十二條 忌避又ハ回避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ前ニ停  
 止シタルヨリ以後ノ手續ニ取掛ル可シ但五日間辯論ヲ停止シ  
 タル時ハ新ニ辯論ヲ爲スヘシ

災變厄難ノ爲メ訴訟手續ヲ停止シタル時亦同シ

第二百八十三條 公判ニ於テ用フ可キ證據ハ豫審ニ於テ用フ可  
 キ證據ニ同シ

第二百八十四條 裁判長ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ  
 又ハ職權ヲ以テ豫審中管轄官吏ノ作りタル調書及ヒ檢計書類  
 ナ朗讀セシムルコトヲ得

是等ノ書類ハ原被証人ノ陳述ト同一ノ効ヲ有ス

第二百八十五條 調書ヲ作りタル司法警察官ハ檢察官其他訴訟  
 關係人ヨリ証人トシテ之ヲ呼出シ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ之  
 ヲ呼出スコトヲ得

豫審判事ハ裁判所ノ職權ニ因リ又ハ檢察官其他訴訟關係人ヨ  
 リ其裁判所ノ允許ヲ得テ調書説明ノ爲メ之ヲ呼出スコトヲ得  
 第二百八十六條 豫審ニ於テ訊問シタル証人ハ更ニ之ヲ呼出ス



ヲ得

豫審ニ於テ錄取シタル証人ノ陳述書ハ更ニ其証人ヲ呼出サ、  
ル時証人呼出ヲ受ケ出廷セサル時又ハ豫審及ヒ公判ニ於テノ  
陳述ヲ比較ス可キ時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又  
ハ裁判長ノ職權ヲ以テ之ヲ朗讀セシムルヲ得

第二百八十七條 第百七十八條以下ノ規則ハ公判ノ証人ニモ亦  
之ヲ適用ス

第二百八十八條 証人ハ互ニ言語ヲ接ス可カラス又陳述前辯論  
ニ立會フ可カラス

第二百八十九條 証人ハ左ノ順序ニ從ヒ訊問ス可シ

一 檢察官ノ請求ニ因リ呼出シタル証人

二 民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル証人

三 被告人及ヒ民事擔當人ノ請求ニ因リ呼出シタル証人

第二百九十條 証人數名アル時ハ氏名目錄ノ順序ニ從ヒ之ヲ訊  
問ス可シ但裁判長ハ証人ヲ呼出シタル者ノ意見ヲ聽キ其順序  
ヲ變更スルヲ得

第二百九十一條 証人及ヒ被告人ハ裁判長ニ非サレハ之ヲ訊問  
スルヲ得ス

陪席判事及ヒ檢察官ハ裁判長ニ告ケ証人及ヒ被告人ヲ訊問ス  
ルヲ得

訴訟關係人ハ辯論ニ必用ナリトスル條件ヲ分明ナラシムル爲  
メ証人ヲ訊問ス可キヲ裁判長ニ求ムルヲ得

第二百九十二條 証人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ  
刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官其他訴  
訟關係人ノ請求ニ依リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押ヘ拘引狀ヲ以  
テ豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

其証人ノ陳述ハ書記之ヲ錄取シ豫審判事ニ送致ス可シ  
本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢察官其他訴訟關係人ノ請求  
ニ因リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ事件ニ付キ裁判ノ延期ヲ言渡ス  
ヲ得

第二百九十三條 証人呼出ニ應セサル時ハ裁判所ニ於テ即時ニ  
檢察官ノ意見ヲ聽キ左ノ科料罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對  
シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

一 違警罪事件ニ付テハ五拾錢以上壹圓九拾五錢以下ノ科料  
二 輕罪以上ノ事件ニ付テハ貳圓以上拾圓以下ノ罰金  
被告人闕席シタル時ハ其呼出シタル証人出廷セスト雖モ科料  
罰金ヲ言渡ス可カラス

第二百九十四條 前條ノ言渡書ハ即時ニ書記ヨリ本人ニ送達ス  
ヘシ

其言渡ヲ受ケタル者三日内ニ出廷スルヲ能ハカリシ正當ノ事  
由ヲ証明シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ科料又  
ハ罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ但重罪裁判所閉廳ノ後ハ其開廳シ  
タル裁判所ニ其申立ヲ爲ス可シ

第二百九十五條 証人呼出ニ應セサル時ハ檢察官其他訴訟關係  
人ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公判ヲ延期スルノ言  
渡ヲ爲スヲ得

檢察官自ラ其請求ヲ爲サ、ル時ハ公判ノ延期ニ付キ意見ヲ陳  
述スヘシ

第二百九十六條 証人再度ノ呼出ヲ受ケ仍ホ出廷セサル時ハ檢  
察官ノ意見ヲ聽キ前ニ定メタル科料罰金ノ二倍及ヒ再度ノ呼  
出ノ費用ヲ言渡ス可シ此場合ニ於テモ亦前條ニ從ヒ再ヒ公判  
ヲ延期スルヲ得但延期シタル時ハ其証人ニ對シ拘引狀ヲ發

スヘシ

第二百九十七條 第九十一條以下ノ規則ハ公判ニ於テ新ニ命シタル鑑定人コモ亦之ヲ適用ス但呼出ニ應セサル時ハ第二百九十三條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ

鑑定人ノ鑑定シタル事件ニ付キ説明ノ爲メ更ニ之ヲ呼出ス時ハ証人ニ付キ定メタル前數條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ

第二百九十八條 被告人聾者啞者又ハ國語ニ通セサル者ナル時ハ第二百五十六條第百五十七條ノ規則ニ從フ

第二百九十九條 被告人數名アル時ハ裁判長其意見ヲ述ヘ且檢察官其他訴訟關係人ノ意見ヲ聽キ訊問ノ順序ヲ定ムヘシ  
裁判長ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルヲ得

第三百條 証憑調濟ノ後檢察官民事原告人被告人其辯護人及ヒ

民事擔當人ハ順次發言ス可シ

檢察官其他訴訟關係人ノ陳述ハ他ヨリ妨礙スルヲ得ス

檢察官其他訴訟關係人ハ迭ヒニ辯論ヲ爲スヲ得但辯論ノ最終ニハ被告人又ハ辯護人ヲシテ發言セシム可シ

第三百一條 檢察官公訴ヲ拋棄スト雖モ裁判所ニ於テハ本按ニ付キ相當ノ裁判ヲ爲ス可シ

第三百二條 辯論中公判ノ手續ニ附キ異議ノ申立アリタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ之ヲ判決スヘシ但其判決ニ對スル控訴又ハ上告ハ本案ノ裁判言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スヲ得ス

第三百三條 民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス何時ニテモ其訴訟ニ關係スルヲ得

又民事原告人ハ民事擔當人ヲシテ其訴訟ニ關係セシムルヲ得

若シ異議ノ申立アリタル時ハ其裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ  
其判決ニ對シテハ本案ノ裁判言渡ヲ待タス直チニ控訴又ハ上  
告ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第三百四條 裁判所ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲スニハ事實及ヒ法律ニ  
依リ其理由ヲ明示シ且一切ノ證據ヲ明示ス可シ  
免訴ノ言渡ヲ爲スニ付テモ亦同シ

第三百五條 無罪ノ言渡ヲ爲スニハ其理由トシテ被告人ニ對シ  
犯罪ノ證據ナキコトヲ明示ス可シ

第三百六條 裁判所ニ於テハ公訴ノ裁判ト同時ニ私訴ノ裁判言  
渡ヲ爲スヘシ

私訴ニ付キ取り調未タ充分ナラサル時ハ公訴ノ裁判アタル後  
其裁判言渡ヲ爲スコトヲ得

第三百七條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ裁判所ノ職權ヲ以

テ公訴裁判費用ノ全部又ハ幾分ヲ擔當ス可キノ言渡ヲ爲ス可  
シ

免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴裁判費用ハ官ニ  
テ之ヲ擔當ス可シ

私訴裁判費用ハ民事ノ規則ニ從ヒ敗訴シタル者之ヲ擔當ス可  
シ

第三百八條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタルト否トヲ問ハス沒收ニ  
係ラサル差押物品ハ所有主ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付スルノ  
言渡ヲ爲ス可シ

第三百九條 本案ノ裁判言渡ニ對スル上訴ノ期限内又上訴アリ  
タル時ハ其判決アルマテ裁判執行ヲ停止ス

第三百十條 禁錮以上ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡シタル時ハ  
現ニ捕ニ就クニ非サレハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

第三百十一條 拘留ヲ受ケタル者上訴ヲ爲シ又ハ保釋ヲ求ムル時ハ其申立書ヲ監獄長ニ差出シ監獄長ヨリ之ヲ其裁判所ノ書記ニ差出ス可シ

第三百十二條 訴訟關係人又ハ其代人非常ノ變災厄難ニ因リ上訴期限ヲ經過シタル場合ニ於テ其旨ヲ証明シタル時ハ期限ヲ經過シタルニ因リ失ヒタル權利ヲ回復スルヲ得但變災厄難ヲ免カレタルヨリ通常ノ期限内ニ其證據ヲ申立書ニ添へ上訴ヲ爲ス可シ

第三百十三條 書記ハ速ニ前條ノ申立書ヲ對手人ニ送達ス可シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スヲ得

上訴ヲ判決ス可キ裁判所ニ於テハ會議局ニテ檢察官ノ意見ヲ聽キ先ツ其上訴ヲ受理ス可キヤ否判決ス可シ  
上訴ヲ受理スヘキ者ト判決シタル時ハ書記ヲシテ其旨ヲ訴訟

關係人ニ通知セシメ通常ノ規則ニ從ヒ本案ノ裁判ヲ爲ス可シ  
上訴ヲ受理ス可カラサル者ト判決シタル時ハ他ノ原由アルコト非サレハ即時ニ裁判執行ヲ爲サシム可シ

第三百十四條 裁判言渡ハ辯論ヲ終リタル後公廷ニ於テ即時ニ之ヲ爲シ又ハ次日ニ之ヲ爲ス可シ

裁判言渡書ハ其言渡前裁判官之ヲ作り書記ト共ニ署名捺印ス可シ

裁判言渡書ニハ其言渡ヲ爲シタル裁判所年月日其事件ニ干預シタル檢察官ノ氏名ヲ記載ス可シ

第三百十五條 訴訟關係人ハ其費用ヲ以テ裁判言渡書ノ謄本又ハ其拔書ヲ求ムルヲ得但上訴ノ爲メ其求ヲ爲シタル時ハ書記ヨリ二十四時内ニ之ヲ下付ス可シ

第三百十六條 對審裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ裁判長ヨ

リ其言渡ヲ受ケタル者ニ前條ノ請求及ヒ其言渡ニ對シ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得可キヲ及ヒ其期限ヲ告知シ又闕席裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得可キヲ及ヒ其期限ヲ言渡書ニ記載ス可シ  
若シ其告知又ハ記載ナキ時ハ通常ノ規則ニ從ヒ其告知アルマテ上訴期限ノ經過ヲ停止ス

第三百十七條

書記ハ各事件ニ付キ各別ニ公判始末書ヲ作り左ノ事件其他一切ノ訴訟手續ヲ記載ス可シ

一 裁判ヲ公行シタルヲ又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡アリタルヲ及ヒ其事由

二 被告人訊問及ヒ其陳述

三 證人鑑定人ノ陳述及ヒ宣誓ヲ爲シタルヲ若シ宣誓ヲ爲サル時ハ其事由

四 原被ノ證據物件

五 辯論中異議ノ申立アリタルヲ後日ヲ期シテ申立ツ可キ事件ヲ申立タルヲ是等ノ事件ニ付キ檢察官其他訴訟關係人ノ意見及ヒ裁判所ノ判決

六 辯論ノ順序及ヒ被告人ヲシテ最終ニ發言セシメタル事

第三百十八條 公判始末書ニハ前條ニ記載シタル條件ノ外言渡ヲ爲シタル裁判所年月日裁判長陪席判事檢察官及ヒ書記ノ氏名ヲ記載ス可シ

辯論數日ニ渉ル時ハ其旨及ヒ同一ノ裁判官出席シタルヲ記載ス可シ

辯論中豫備判事ヲシテ代ラシメタル時ハ其旨ヲ記載ス可シ檢察官及ヒ書記ニ於テモ亦同シ

第三百十九條 公判始末書ハ裁判言渡ヨリ三日内ニ之ヲ整頓シ

裁判長及ヒ書記署名捺印ス可シ

裁判長ハ署名捺印セサル以前ニ公判始末書ヲ檢閲シ若シ意見  
アル時ハ其紙尾ニ記載ス可シ

第三百二十條 裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ正本ハ其裁判所ノ  
書記局ニ保存ス可シ

上訴アリタル時ハ裁判長及ヒ書記裁判言渡書及ヒ公判始末書  
ノ原本ニ認印シ之ヲ上訴書類ニ添フ可シ

第二章 違警罪公判

第三百二十一條 違警罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ於テ公訴ヲ  
受理ス

一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出  
狀

二 豫審判事又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言

渡

第三百二十二條 呼出狀ニハ呼出ヲ受ク可キ者ノ氏名職業住所

出廷ノ日時被告事件及ヒ代人ヲシテ出廷セシムルヲ得可キ  
旨ヲ記載ス可シ若シ被告事件ノ記載ナキ場合ニ於テ被告人未  
タ其証人ヲ呼出サル時ハ公廷ニテ其事件ノ告知ヲ受ケタル  
後其呼出及ヒ辯護ノ爲メ二日ノ猶豫ヲ求ムルヲ得

第三百二十三條 呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶  
豫アル可シ

第三百二十四條 違警罪裁判官ハ被告事件急速ヲ要スル時ハ公  
判ニ取掛ル前檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ依リ又ハ職權ヲ  
以テ對手人ノ立會ヲ要セスヲ檢証處分ヲ爲スヲ得

第三百二十五條 証人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二  
十四時ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

又呼出ヲ受ケスシテ出廷シタル者ト雖モ訊問前其名刺ヲ書記ニ差出シタル時ハ裁判所ニ於テ證人トシテ其陳述ヲ聽クコトヲ得

第三百二十六條 書記ハ各事件毎ニ訴訟關係人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ若シ其呼立ニ應セサル時ハ他ノ事件ノ裁判ヲ終リタル後其事件ヲ裁判ス可シ

第三百二十七條 違警罪裁判官ハ最初ニ被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ

官吏ノ作リタル調書又ハ中立書アル時ハ書記之ヲ朗讀ス可シ  
檢察官ハ被告事件ヲ陳述ス可シ

第三百二十八條 違警罪裁判官ハ被告人ニ被告事件ヲ承認スルヤ否ヲ訊問ス可シ

若シ被告人代人ヲ以テ白狀ヲ爲ス時ハ其署名捺印シタル書面

ヲ差出ス可シ

第三百二十九條 被告人ノ白狀アリタル時ハ他ノ証憑ヲ差出スニ及ハス但裁判所ニ於テハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ差出カシムルコトヲ得

若シ白狀ナキ時ハ原被ノ証人ヲ訊問シ其他證憑アル時ハ之ヲ差出ス可シ

第三百三十條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ  
民事原告人ハ被害事件ヲ證明シ及ヒ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

被告人民事擔當人又ハ其代人ハ答辯ヲ爲ス可シ

第三百三十一條 呼出ヲ受ケタル被告人民事擔當人又ハ其代人出廷セサル時ハ檢察官及ヒ民事原告人ノ請求スル所ヲ聽キ闕席裁判ヲ爲ス可シ



民事原告人出廷セサル時亦同シ

第三百三十二條 闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ依リ闕席シタル者又ハ其住所ニ之ヲ送達ス可シ

闕席裁判ヲ受ケタル者故障ヲ爲サントスル時ハ言渡書ノ送達アリタルヨリ三日内ニ其申立書ヲ書記局ニ差出ス可シ

第三百三十三條 裁判所ニ於テハ先ツ故障ノ申立ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ若シ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記ヨリ故障アリタルヲ及ヒ其事件ヲ公判ニ付ス可キ日時ヲ故障ノ對于人ニ通知スル爲メ呼出狀ヲ送達スヘシ但其送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

又公判ニ付ス可キ日時ヲ其前日ニ故障ノ申立人ニ報知ス可シ

第三百三十四條 故障ノ申立ヲ受理シタル場合ニ於テハ第三百二十六條ヨリ第三百卅條迄ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ

其裁判ニ闕席シタル者ハ故障ヲ爲スヲ得ス

第三百三十五條 犯罪ノ證據充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百三十六條 被告事件違警罪ニシテ且証憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百三十七條 被告事件重罪又ハ輕罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ其事件ヲ輕罪裁判所檢事ニ送致ス可シ但被告人ニ對シ拘留狀ヲ發スルヲ得

第三百三十八條 違警罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ニ控訴スルヲ得  
一 被告人ハ勾留ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時

二民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ附テノ言渡民事  
上治安裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時

三檢察官其他訴訟關係人ハ上ニ記載シタル原由アラサル時ト  
雖モ管轄逾越權擬律ノ錯誤又ハ無効ノ記載アル規則ニ背キ  
タル時

第三百三十九條 控訴ヲ爲サントスル者ハ原裁判所ノ書記局ニ  
其申立書ヲ差出ス可シ但其申立ノ期限ハ對審裁判ニ附テハ言  
渡ヨリ三日内又闕席裁判ニ附キ故障アラサル時ハ本人又ハ其  
住所ニ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日内トス  
控訴ヲ爲スノ申立アリタル時ハ書記ヨリ其旨ヲ對手人ニ通知  
ス可シ

第三百四十條 訴訟ニ關スル一切ノ書類ハ檢察官ヨリ控訴ヲ受  
ク可キ裁判所ノ書記局ニ之ヲ送致ス可シ

若シ檢察官控訴ノ申立人又ハ對手人ナル時ハ控訴ヲ受ク可キ  
裁判所ノ檢察官ニ其意見書ヲ差出ス可シ

第三百四十一條 控訴ヲ受ク可キ裁判所ニ於テハ書記局ヨリ訴  
訟關係人ニ對シ呼出狀ヲ發シタル後其裁判ニ取掛ル可シ  
呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ  
証人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ  
之ヲ呼出ス可シ

第三百四十二條 控訴ノ對手人ハ其裁判言渡アルマテ何時ニテ  
モ附帶ノ控訴ヲ爲スコトヲ得但附帶ノ控訴ハ公廷ニ於テ直チニ  
之ヲ申立ルコトヲ得

第三百四十三條 控訴ニ係ル事件ハ輕罪ノ裁判ヲ爲スニ附キ定  
メタル規則ニ從ヒ之ヲ裁判ス可シ  
檢察官其他訴訟關係人ハ裁判長ノ允許ヲ得ルニ非サレハ新ナ

ル証人又ハ始審ニ於テ陳述シタル証人ヲ呼出スヲ得ス

第三百四十四條 控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ原裁判言渡ヲ認可スルノ言渡ヲ爲シ又ハ之ヲ取消シ更ニ裁判言渡ヲ爲ス可シ被告人ノミ控訴ヲ爲シタル時ハ原裁判言渡ヨリ重キ刑ヲ言渡スヲ得ス

私訴ニ付テノ控訴ノ裁判ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第三百四十五條 第三百三十一條以下ノ規則ハ控訴ノ闕席裁判ニ付テ亦之ヲ適用ス

第三百四十六條 檢察官其他訴訟關係人ハ違警罪事件ノ終審ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヲ得

第三章 輕罪公判

第三百四十七條 輕罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀

二 豫審判事輕罪裁判所會議局又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百四十八條 呼出狀ニ附テハ第三百二十二條第三百二十三條ノ規則ニ從フ

第三百四十九條 被告事件罰金ノ刑ニ該ル可キ時ハ代人ヲシテ出廷セシムルヲ得可キ旨ヲ呼出狀ニ記載ス可シ

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ代人ヲシテ出廷セシムルヲ得  
第三百五十條 証人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百五十一條 第三百二十四條ノ規則ハ豫審ヲ經カル輕罪事件ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十二條 檢察官ハ裁判長ヨリ被告人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地ヲ問ヒタル後被告事件ヲ陳述ス可シ  
民事原告人ハ被害事件ヲ証明ス可シ

調書又ハ申立書アル時ハ書記ヲシテ朗讀セシメ次ニ原被証人ノ陳述ヲ聽キ且證據物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシム可シ  
被告人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ爲ス可シ

第三百五十三條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ要償ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ  
被告人及ヒ民事擔當人ハ更ニ答辯ヲ爲ス可シ

第三百五十四條 罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人又ハ第二百六十九條ノ規則ニ從ヒ闕席裁判ヲ爲ス可シ得ヘキ被告人其呼出ノ日時ニ出廷セサル時ハ闕席裁判ヲ爲ス可シ

第三百五十五條 闕席裁判ニ關スル第三百三十一條ヨリ第三百三十四條マテノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十六條 闕席裁判ニ因リ禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ左ノ場合ヲ除クノ外刑ノ期滿免除ニ至ルマテ故障ヲ爲ス可シ得

- 一 被告人本案ノ裁判前豫メ裁判ス可キ事件ヲ申立タル時
- 二 裁判言渡書ヲ本人ニ送達シタル時
- 三 被告人裁判執行ニ因リ刑ノ言渡アリタルヲ知リタルノ證アル時

第一ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ第二第三ノ場合ニ於テハ言渡アリタルヲ知リタルヨリ三日内ニ故障ヲ爲ス可シ得

第三百五十七條 裁判所ニ於テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル

時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ新ナル證人ヲ呼出シ鑑定人ヲ命シ若シハ臨檢ヲ爲スヲ得但是等ノ處分ヲ爲スニ付テハ第三編第三章ニ定メタル規則ニ從フ又豫審ヲ經サル事件ニ付テハ豫審判事ヲシテ其指示スル所ノ條件ニ付キ取調ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシムルヲ得

第三百五十八條 犯罪ノ証憑充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

本條ノ場合ニ於テ被告人拘留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百五十九條 被告事件違警罪ナル時ハ終審ノ裁判言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百六十條 被告事件重罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ若シ豫審ヲ經サル時ハ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ但被告人拘留ヲ受ケサル時ハ拘引狀ヲ發ス可シ  
訴訟書類及ヒ證據物件ハ檢察官ヨリ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

第三百六十一條 被告事件豫審ヲ經タル時ハ之ヲ其裁判所ノ會議局ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

會議局ニ於テハ第二百五十三條第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ取調ヲ爲シ被告人ヲ管轄裁判所ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ  
第三百六十二條 會議局ノ言渡ニ因リ事件ヲ受理シタル場合ニ於テ新ナル証憑ヲ發見スルコトナクシテ其事件ヲ重罪ナリトスル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲ス可シ  
檢事ハ大審院ニ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可シ

第三百六十三條 前二條ノ場合ニ於テハ會議局又ハ大審院ノ判決アルマテ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ被告人ヲ其裁判所ノ監倉ニ留置スルノ言渡ヲ爲スヲ得

又第二百十條以下ノ規則ニ從ヒ保釋ニ付キ判決ヲ爲スヲ得  
第三百六十四條 被告事件輕罪ニシテ且証憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

被告人禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ當然保釋責付ヲ取消シタル者トス但上訴中更ニ保釋ヲ求ムルヲ得

第三百六十五條 檢察官其他訴訟關係人ハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シ控訴裁判所ニ控訴スルヲ得  
一 檢察官ハ無罪免訴又ハ刑ノ言渡アリタル時但違警罪事件トシテ言渡アリタル場合ニ於テハ其事件ヲ輕罪ナリトスル時  
二 被告人ハ違警罪ニ付テノ言渡ヲ除クノ外刑ノ言渡ヲ受ケタ

ル時

三 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡民事上始審裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時

四 檢察官其他訴訟關係人ハ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時

第三百六十六條 控訴ハ裁判言渡アリタルヨリ五日內ニ之ヲ爲スヲ得

闕席裁判ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲サスシテ直チニ控訴ヲ爲スヲ得但第三百五十六條ノ場合ニ於テハ五日內ニ之ヲ爲ス可シ

第三百六十七條 公訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴アリタル場合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ檢察官ヨリ之ヲ控訴裁判所ノ監倉ニ移ス可シ

第三百六十八條 第三百三十九條ヨリ第三百四十二條マテ及ヒ  
第三百四十四條ノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス

第三百六十九條 輕罪裁判所檢事ノ控訴又ハ檢事長ノ附帶ノ控  
訴アリタル場合ニ於テ被告事件ヲ重罪ナリトスル時ハ第二百  
五十五條ノ規則ニ從ヒ會議局ニ於テ重罪裁判所ニ移スノ言渡  
ヲ爲ス可シ

第三百七十條 控訴ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付テハ始審ノ闕席  
裁判及ヒ其故障ニ付キ定メタル規則ニ從フ

第三百七十一條 檢察官其他訴訟關係人ハ輕罪裁判所ノ終審ノ  
對審裁判言渡及ヒ控訴裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲  
スヲ得

第四章 重罪公判

第三百七十二條 重罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ

受理ス

一 豫審判事又ハ輕罪裁判所會議局ノ判決ニ因リ其事件ヲ移ス  
ノ言渡

二 控訴裁判所又ハ大審院ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百七十三條 重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ左ノ  
區別ニ從ヒ公訴狀ヲ作ル可シ

控訴裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作ル  
可シ

始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作り  
又ハ重罪裁判所檢察官ノ職務ヲ行フ可キ檢事ヲシテ之ヲ作ラ  
シム可シ

第三百七十四條 公訴狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

一 被告事件ノ始末及ヒ加重減輕ノ摸樣

二被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地  
三豫審ニ於テ集取シタル原被ノ證憑

四罪名法律ノ正條及ヒ重罪裁判所ニ移スノ言渡ノ概要

第三百七十五條 公訴狀ニハ重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ記載シタルヨリ以外ノ事件又ハ被告人ヲ記載ス可カラス

第三百七十六條 重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ同一ノ被告人ニ對シ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ檢察官ハ各別ニ公訴狀ヲ作りタル上ニテ各別ニ辯論ヲ爲スヲ裁判所長ニ請求スルヲ得

裁判所長ハ同一ノ公訴狀ニ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ其職權ヲ以テ各別ニ辯論ヲ爲サシムルヲ得又數箇ノ公訴狀ニ記載シタル事件ニ付キ同時ニ辯論ヲ爲サシムルヲ得

第三百七十七條 書記ハ被告人出廷ヨリ少クト五モ日前ニ公訴狀ノ謄本ヲ被告人ニ送達ス可シ

被告人數名アル時ハ各別ニ其謄本ヲ送達ス可シ

第三百七十八條 重罪裁判所長又ハ其委任ヲ受ケタル陪席判事ハ公訴狀ノ送達アリタルヨリ二十四時ノ後書記ノ立會ニ依リ被告事件ニ付キ被告人ヲ訊問シ且辯護人ヲ選任シタリヤ否ヲ問フ可シ

若シ辯護人ヲ選任セサル時ハ裁判所長ノ職權ヲ以テ其裁判所々屬ノ代官人中ヨリ之ヲ選任ス可シ

被告人及ヒ代官人ヨリ異議ノ申立ナキ時ハ代官人一名ヲシテ被告人數名ノ辯護ヲ爲サシムルヲ得

辯護人ヲ選任シタルヨリ三日ノ後ニ非サレハ辯論ニ取掛ルヲ得



第三百七十九條 辯護人差支アル時若クハ被告人ヨリ之ヲ改選ス可キ正當ノ事由ヲ申立タル時被告人自ラ辯護人ヲ選任スルニ非カレハ前條ノ規則ニ從ヒ裁判所長ヨリ之ヲ選任ス可シ但辯護人ヲ改選シタル時ハ三日間辯論ヲ停止ス可シ

第三百八十條 書記ハ第三百七十八條ノ場合ニ於テ訊問ノ調書ヲ作り辯護人ヲ選任スルニ付キ其式ヲ履行シタルヲ記載ス可シ

辯論中辯護人ヲ改選シ及ヒ辯論ヲ停止シタル時ハ公判始末書ニ其旨ヲ記載スヘシ

第三百八十一條 辯護人ナクシテ辯論ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ノ効ナカル可シ

第三百七十七條ヨリ第三百七十九條マテノ規則ニ背キタルヲアリト雖モ辯論ニ取掛ル前ニ非カレハ被告人ヨリ異議ノ申立

ヲ爲スヲ得ス

第三百八十二條 辯護人ハ第三百七十八條ノ處分アリタル後被告人ト接見スルヲ得

又書記局ニ於テ一切ノ訴訟書類ヲ閱讀シ且之ヲ抄寫スルヲ得

辯護人ヲ除クノ外何人ト雖モ重罪裁判所ニ移スノ言渡アリタルヨリ裁判言渡アルマテ被告人ト接見スルヲ得ス但被告人現ニ勾留ヲ受クル地ノ裁判所長ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラス

第三百八十三條 檢察官及ヒ民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル証人ノ氏名目錄ハ開廷ヨリ一日前之ヲ被告人ニ送達ス可シ被告人ノ請求ニ因リ呼出シタル証人ノ氏名目錄ハ同上ノ期限内ニ書記ヨリ之ヲ檢察官ニ送致シ民事ニ付キ呼出シタル証人

ノ氏名目録ハ之ヲ民事原告人ニ送達ス可シ

第三百八十四條 前條ノ規則ニ從ヒ豫メ氏名ヲ通知セサル証人ノ陳述ハ事實參考ノ爲メニ非サレハ之ヲ聽クコトヲ得ス但對手人ヨリ異議ナキコトヲ申立タル時ハ証人トシテ其陳述ヲ聽クコトヲ得

第三百八十五條 証人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百八十六條 裁判長ハ開廳ノ日ニ當リ公廷ニ於テ陪席判事檢察官ノ面前ニテ開廳ス可キコトヲ陳述ス可シ但被告人ヲ呼出ス可カラス

第三百八十七條 裁判長辯論二日以上ニ渉ル可シト思料シタル時ハ重罪裁判所々在ノ地ノ裁判所判事一名ヲ以テ豫備陪席判事ト爲スコトヲ得

第三百八十八條 裁判官檢察官及ヒ書記各其席ニ就キタル後即

時ニ訊問及ヒ辯論ニ取掛ル可シ

裁判長ハ先ツ被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ

若シ其答辭ト豫審中ノ陳述ト齟齬アリト雖モ公訴狀ニ記載シタル被告人ニ相違ナキ時ハ引續キ辯論ヲ爲ス可シ

第三百八十九條 書記ハ呼出シタル証人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ其呼立ニ應シタル証人ハ扣席ニ退カシメ陳述ヲ爲スニ當リ順次ニ之ヲ呼入ル可シ

第三百九十條 裁判長ハ書記ヲシテ公訴狀ヲ朗讀セシムルニ付キ注意シテ聽ク可キコトヲ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十一條 裁判長ハ書記前條ノ朗讀ヲ終リタル後被告人ヲ訊問ス可シ

被告人豫審中ニ白狀シタル事件ヲ確認セス又ハ之ヲ取消サントスル時ハ其事由ヲ辯明セシム可シ

被告人ノ白狀アリト雖モ仍ホ其取調ヲ爲サル可カラス

第三百九十二條 裁判長ハ前條ノ訊問ヲ終リタル後証憑ヲ差出スニ從ヒ其証憑ニ付キ辯解ヲ爲シ且自己ノ利益ト爲ル可キ反証ヲ差出スヲ得可キヲ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十三條 裁判長ハ原告証人陳述ヲ終リタル毎ニ被告人ニ意見アリヤ否ヲ問フ可シ

第三百九十四條 証人ハ陳述ヲ爲シタル後其扣席ニ留ル可シ但裁判長ヨリ退廷ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラス

陪席判事檢察官被告人及ヒ民事原告人ハ更ニ証人ヲ訊問スルヲ又証人ナシテ他ノ證人ト對質セシムルヲ請求スルヲ得裁判長ハ職權ヲ以テ前項ノ處分ヲ爲スヲ得

第三百九十五條 裁判長ハ証人愛憎畏懼ノ念ヲ生シ被告人ノ面前ニ於テ充分ナル陳述ヲ爲スヲ得サル可シト思料シタル時ハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其證人ノ陳述中被告人ヲ退席セシムルヲ得  
裁判長ハ證人陳述ヲ終リタル後再ヒ被告人ヲ公廷ニ呼入レ其陳述シタル條件ヲ告知シ且被告人ニ意見アル時ハ之ヲ申立シム可シ

第三百九十六條 裁判長ハ第三百條ニ定メタル手續ノ終リタル後公訴ニ付キ辯論ノ終結シタルヲ言渡ス可シ

第三百九十七條 檢察官及ヒ被告人ハ辯論中ニ發見シタル條件ニ付キ豫審ヲ求ムルヲ得裁判所ニ於テ其請求ヲ認可シタル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシム可シ

第三百五十七條第一項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第三百九十八條 辯論終結ノ言渡アリタル時ハ檢察官法律適用ノ爲メ其意見ヲ陳述ス可シ

被告人及ヒ辯護人ハ檢察官ノ意見其當ヲ得サルコトヲ辯論スルヲ得

第三百九十九條 前條ノ辯論ヲ終リタル後民事原告人ハ私訴ニ付キ其請求スル所ヲ陳述ス可シ被告人辯護人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ爲スコトヲ得

檢察官ハ私訴ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

裁判所ニ於テハ私訴ノ辯論ヲ延期スルコトヲ得但閉廳前之ヲ判決ス可シ

第四百條 被告事件重罪ニシテ且証憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲スヘシ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ私訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ

第四百一條 犯罪ノ証憑充分ナラサル時ハ無罪ノ言渡ヲ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ

又原被ノ要償ニ付キ第三百九十九條ノ規則ニ從ヒ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百二條 辯論中公訴狀ニ記載シタル事件ニ附帶セサル他ノ重罪輕罪ヲ發見シタル場合ニ於テ檢察官ノ請求アル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲サシメ本會又ハ次會ニ於テ本案ノ事件ト共ニ之ヲ裁判ス可シ

第四百三條 檢察官其他訴訟關係人ハ重罪裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スコトヲ得

第四百四條 闕席裁判ヲ爲スニハ裁判長書記ヲシテ公訴狀及ヒ

必要ナリトスル豫審書類ヲ朗讀セシメ又原被証人ノ陳述ヲ聽  
シ可シ

檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述シ民事原告人ハ要償ニ  
付キ意見ヲ陳述ス可シ

民事擔當人ハ答辯スルヲ得

第四百五條 闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ  
因リ本人又ハ其住所ニ送達ス可シ

第四百六條 闕席裁判ニ係ル刑ノ言渡ニ對シテハ檢察官ニ非サ  
レハ上告ヲ爲スヲ得ス

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ノ裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲  
スヲ得

第四百七條 闕席裁判ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿  
免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スヲ得但捕ニ就キタル

時ハ十日内ニ故障ヲ爲ス可シ

第四百八條 故障ノ申立ハ闕席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所ニ之  
ヲ爲ス可シ

重罪裁判所ニ於テハ先ツ其故障ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可  
シ

其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ本會又ハ次會ニ於テ  
通常ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ

第四百九條 闕席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所閉廳ノ後ハ其地ヲ  
管轄スル控訴裁判所ニ故障ノ申立ヲ爲スヘシ

控訴裁判所ニ於テ其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ通  
常ノ規則ニ從ヒ更ニ重罪裁判所ノ裁判ヲ受ク可キノ言渡ヲ爲  
ス可シ

第五編 大審院ノ職務

第一章 上告

第四百十條 檢察官及ヒ被告人ハ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ左

ノ場合ニ於テ上告ヲ爲スヲ得

一法律ニ背キ忌避ノ申立ヲ認可セサル時

二裁判所ノ構成規則ニ背キタル時

三法律ニ背キ管轄違又ハ管轄ナリトノ言渡若クハ管轄ニ非サ

ル裁判所ニ事件ヲ移スノ言渡アリタル時

四法律ニ於テ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時又ハ無効ノ記

載ナキ規則ニ背キタルニ因リ異議ノ申立アリタル場合ニ於

テ之ヲ認可セサル時

五法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサル時

六法律ニ定メタル場合ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽カサル時

七裁判所ニ於テ請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲サス又ハ

職權ヲ以テ判決スルヲ得ヘキ場合ヲ除クノ外請求ヲ受ケ

サル事件ニ付キ判決ヲ爲シタル時

八裁判言渡ヲ公行セス又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡ナクシテ訊問

及ヒ辯論ヲ公行セサル時

九事實及ヒ法律ニ依リ言渡ノ理由ヲ付セス又ハ其理由ノ齟齬

アル時

十擬律ノ錯誤アル時

十一越權ノ處分アル時

第四百十一條 免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テハ被告

人ノ利益ノ爲メ定メタル規則ニ背キタルヲ又ハ犯罪ノ場所ニ

因リ管轄違アリト雖モ上告ヲ爲スヲ得ス

第四百十二條 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ニ關ス

ル豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ第四百十條ニ定メタル理由ニ付  
キ上告ヲ爲スコトヲ得

第四百十三條 上告ノ對手人ハ大審院ノ判決アルマテ何時ニテ  
モ附帶ノ上告ヲ爲スコトヲ得

大審院檢事長モ亦附帶ノ上告ヲ爲スコトヲ得

第四百十四條 上告ノ期限ハ三日ナリトス但豫審ニ附テハ言渡  
書ノ送達アリタルヨリ起算シ公判ニ附テハ言渡アリタルヨリ  
起算ス

第四百十五條 豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上告アリタル時ハ拘  
留保釋貴附釋放及ヒ放免ノ言渡ヲ除クノ外其執行ヲ停止ス

第四百十六條 上告ヲ爲サントスル者ハ其申立書ヲ原裁判所ノ  
書記局ニ差出ス可シ

上告ノ申立書ハ其申立アリタルヨリ二十四時内ニ書記ヨリ之

ヲ對手人ニ送達ス可シ

第四百十七條 上告申立人ハ其申立ヲ爲シタルヨリ五日内ニ趣  
意書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ對手人  
ニ送達ス可シ

第四百十八條 對手人ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ五日内ニ  
答辯書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ其答辯書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ上告申立  
人ニ送達ス可シ

第四百十九條 檢察官ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辯書ハ  
二通ヲ作リ一通ヲ大審院ニ差出シ一通ヲ對手人ニ送達ス可シ  
私訴ノ裁判言渡ニ對シ訴訟關係人ヨリ差出ス可キ上告趣意書  
又ハ答辯書ニ付テモ亦同シ

第四百二十條 書記ハ前數條ニ定メタル期限經過シタル後速ニ訴訟書類及ヒ上告書類ヲ其裁判所ノ檢察官ニ差出ス可シ  
檢察官ハ其書類ヲ五日内ニ大審院檢察長ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ添フ可シ

檢察長ハ上告事件ヲ刑事局ノ簿冊ニ登記ス可キヲ院長ニ請求ス可シ

第四百二十一條 上告申立人及ヒ對手人ハ代言人ヲ差出ス可シ得

重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲シ又ハ檢察官ヨリ重罪ノ刑ニ該ル可キ者トシテ上告ヲ爲シタル場合ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケタル者自ラ代言人ヲ選任セサル時ハ院長ノ職權ヲ以テ其院所屬ノ代言人中ヨリ之ヲ選任ス可シ

第四百二十二條 院長ハ刑事局判事申ニテ專任判事一名ヲ命ス

可シ

專任判事ハ一切ノ書類ヲ檢閲シ其報告書ヲ作ル可シ但自己ノ意見ヲ付ス可カラズ

第四百二十三條 上告申立人及ヒ對手人ハ專任判事ノ報告書ヲ差出スマテハ大審院書記局ヲ經由シテ其趣意ヲ擴張ス可キ辯明書ヲ差出ス可シ得

專任判事報告書ヲ差出シタル後辯明書ヲ差出シタル時ハ之ヲ其報告書ニ添フ可シ

第四百二十四條 書記ハ開廷ヨリ三日前ニ開廷ノ日時ヲ上告申立人及ヒ對手人ノ代言人ニ報知ス可シ

第四百二十五條 開廷ノ日ニハ公廷ニ於テ專任判事其報告書ヲ朗讀ス可シ

檢察長及ヒ代言人ハ各其趣意ヲ辯明ス可シ



私訴ノ上告ニ付テハ、檢事長最終ニ其意見ヲ陳述ス可シ

第四百二十六條 上告申立人又ハ對手人ヨリ、代理人ヲ差出サ、ル時ハ其儘ニテ判決ヲ爲ス可シ

第四百二十七條 大審院ニ於テ上告ノ理由ナシトスル時ハ之ヲ棄却スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第四百二十八條 大審院ニ於テ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對スル上告ニ付キ破毀ノ原由アリトスル時ハ其言渡ノ全部ヲ破毀シ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ但後ノ數條ニ記載シタル場合ハ此限ニ在ラス

第四百二十九條 擬律ノ錯誤若クハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサルコトニ因リ原裁判言渡ヲ破毀シタル時ハ其事件ヲ移スコトク大審院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百三十條 豫審又ハ公判ノ手續規則ニ背キタルコトアリト雖

モ其後ノ手續ニ利害ヲ及ホサル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトナク止メ其手續ヲ破毀ス可シ

第四百三十一條 豫審又ハ公判ノ言渡ノ幾分ニ對シ上告アリタル場合ニ於テ他ノ部分ニ關係アラサル時ハ大審院ニ於テ其上告ニ係ル部分ヲ破毀シ法律ニ從ヒ直チニ相當ノ裁判言渡ヲ爲シ又其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス可シ

第四百三十二條 大審院ニ於テ原裁判言渡ヲ破毀シ直チニ裁判言渡ヲ爲シタル時ハ原裁判所又ハ他ノ裁判所ヲシテ其執行ヲ爲サシム可シ

第四百三十三條 大審院ニ於テ破毀シタル事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可キ時ハ原裁判所ニ接近シタル同等ノ裁判所ヲ定示ス可シ其單ニ私訴ニ係ル事件ハ之ヲ民事裁判所ニ移ス可シ

第四百三十四條 法律ニ係ル大審院ノ判決ハ確定ノ者トス  
大審院ヨリ送付ヲ受ケタル裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ通常  
ノ規則ニ從ヒ更ニ上告ヲ爲スヲ得

第四百三十五條 法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シ又  
ハ相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタル場合ニ於テ定期内ニ上訴  
スル者ナクシテ其裁判言渡確定シタル時ハ大審院檢事長ヨリ  
司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ非常上告ヲ爲ス  
ヲ得

非常上告アリタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ大審院ニ於テ直チ  
ニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百三十六條 左ノ場合ニ於テハ大審院ノ裁判言渡ニ對シ檢  
事長其他訴訟關係人ヨリ其院ニ哀訴スルヲ得

一大審院ニ於テ前數條ニ定メタル式ヲ履行セサル時

一訴訟關係人ヨリ申立タル條件ニ付キ判決ヲ爲サ、ル時

三同一裁判言渡ニ附キ二箇ノ條件齟齬シタル時

第四百三十七條 哀訴ヲ爲サントスル者ハ裁判言渡アリタルヨ  
リ三日内ニ書記局ニ其申立ヲ爲ス可シ

書記ハ申立書ヲ受取リタルヨリ三日内ニ之ヲ對手人ニ送達シ  
對手人ハ同一ノ期限内ニ其答辯書ヲ差出ス可シ

大審院ニ於テハ通常上告規則ニ從ヒ哀訴ノ判決ヲ爲ス可シ

第四百三十八條 大審院ノ裁判言渡ハ其言渡アリタルヨリ三日  
間又哀訴アリタル時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止ス

第二章 再審ノ訴

第四百三十九條 再審ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ重罪輕罪ノ刑ノ言  
渡ニ對シ被告人ノ利益ノ爲メ之ヲ爲スヲ得但裁判確定ノ後  
ニ非サレハ之ヲ爲スヲ得ス

- 一人ヲ殺シタル罪ニ付キ刑ノ言渡アリタル後其言渡ノ日ニ當リ殺ガレタリト認メラレシ者現ニ生存シ又ハ犯罪前既ニ死去シタルノ確證アリタル時
  - 一同一ノ事件ニ付キ共犯ニ非スシテ別ニ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタル時
  - 三犯罪アル以前ニ作リタル公正ノ證書ヲ以テ當時其場所ニ在ラサルコトヲ証明シタル時
  - 四被告人ヲ陷害シタル罪ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタル時
  - 五公正ノ證書ヲ以テ訴訟書類ニ偽造又ハ錯誤アルコトヲ証明シタル時
- 第四百四十條 再審ノ訴ヲ爲スコトヲ得可キ者左ノ如シ
- 一刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官

- 二刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル控訴裁判所ノ檢察官
  - 三大審院檢察長但司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲ス可シ
  - 四刑ノ言渡ヲ受ケタル者
  - 五刑ノ言渡ヲ受ケタル者死去シタル時ハ其親屬
- 第四百四十一條 再審ノ訴ハ刑ノ消滅シタルニ拘ハラズ何時ニテモ之ヲ爲スコト得
- 第四百四十二條 再審ノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ原裁判言渡書ノ謄本及ヒ証憑書類ヲ添ヘ之ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ
- 原裁判所ノ檢察官ハ其書類ニ意見ヲ添ヘ之ヲ大審院檢察長ニ差出ス可シ
- 原裁判所ノ檢察官及ヒ控訴裁判所檢察長自ラ再審ノ訴ヲ爲サ

ソトスル時ハ前項ノ手續ニ從ヒ其書類ヲ差出ス可シ

第四百四十三條 大審院ニ於テハ檢事長ノ請求ニ因リ速ニ專任判事一名ヲシテ其取調ヲ爲シ報告書ヲ差出サシム可シ

第四百四十四條 大審院ニ於テハ他ノ事件ヲ閣キ刑事局判事全員會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢事長ノ意見書ニ依リ判決ヲ爲ス可シ

第四百四十五條 大審院ニ於テ再審ノ原由アルヲ認メタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ公訴及ヒ私訴ニ付キ再審ヲ爲ス可キヲ言渡シ其事件ヲ原裁判所ト同等ナル他ノ裁判所ニ移ス可シ其送付ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ通常ノ規則ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可シ

第四百四十六條 死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲ爲シタル場合ニ於テ大審院ニテ再審ノ原由アルヲ認メタル時ハ其事件ヲ他ノ

裁判所ニ移スヲナク原裁判言渡ヲ破毀ス可シ

第四百四十七條 再審ノ裁判ニ因リ無罪ノ言渡アリタル時又ハ前條ノ場合ニ於テ破毀ノ言渡アリタル時ハ其者ノ名譽ヲ復スル爲メ其言渡書ヲ揭示公告ス可シ

第三章 裁判管轄ヲ定ムルノ訴

第四百四十八條 通常裁判所ト特別裁判所トヲ問ハス管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲シ其言渡確定シタル時又忌避ノ原由若クハ非常ノ變事ニ因リ訴訟事件ヲ管理スルヲ能ハサル時ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲スヲ得  
大審院檢事長司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲スヲ得

第四百四十九條 裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ訴訟書類ヲ添ヘ之ヲ大審院ノ書記局ニ差出ス可シ

第四百五十條 大審院ニ於テハ刑事局判事五名以上會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢事長ノ意見書ニ因リ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ判決シ其事件ヲ管理ス可キ裁判所ヲ定示ス可シ

第四章 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第四百五十一條 犯罪ノ性質被告人ノ身分員數地方ノ民心其他重大ナル事情ニ因リ裁判ニ對シ紛擾又ハ危險ヲ生スルノ恐アル時ハ公安ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移ス可シ

第四百五十二條 公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ司法卿ノ命ニ因リ大審院檢事長ヨリ其院ニ之ヲ爲ス可シ

第四百五十三條 大審院ニ於テハ會議局ニテ訴訟關係人ノ申立ヲ聽クコトヲ速ニ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四百五十四條 被告人ノ身分地方ノ民心又ハ訴訟ノ模様ニ因リ裁判ノ公平ヲ維持スルコト能ハサルノ恐アル時ハ嫌疑ノ爲メ

其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移ス可シ

第四百五十五條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ管轄裁判所ノ檢察官其他訴訟關係人ヨリ之ヲ爲ス可シ

民事原告人嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ爲シ又被告人其裁判所ニ於テ異議ノ申立ナクシテ本案ニ付キ辯論ヲ爲シタル時ハ前項ノ訴ヲ爲ス可シ

第四百五十六條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ヲ爲スニハ其趣意書二通ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ速ニ一通ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ其送達アリタルヨリ三日内ニ答辯書ヲ差出ス可シ

第四百五十七條 大審院ニ於テハ第四百五十條ノ規則ニ從ヒ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四百五十八條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴アリタル時ハ

裁判所ニ於テ其訴訟手續ヲ停止ス

第六編 裁判執行復権及ヒ特赦

第一章 裁判執行

第四百五十九條 重罪輕罪違警罪ノ刑ハ裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ執行ス可カラス

第四百六十條 死刑ノ言渡確定シタル時ハ檢察官ヨリ速ニ訴訟書類ヲ司法卿ニ差出ス可シ

司法卿ヨリ死刑ヲ執行ス可キノ命令アリタル時ハ三日内ニ其執行ヲ爲ス可シ

第四百六十一條 死刑ヲ除クノ外刑ノ言渡確定シタル時ハ直チニ之ヲ執行ス可シ

第四百六十二條 刑ノ執行ハ原裁判所ノ檢察官又ハ大審院ヨリ命ヲ受ケタル裁判所ノ檢察官ノ指揮ニ因リ之ヲ爲ス可シ

罰金科料裁判費用及ヒ沒收物品ハ檢察官ノ命令書ニ依リ之ヲ徵收ス可シ

破壊又ハ廢棄ス可キ沒收物品ハ檢察官之ヲ處分ス可シ

第四百六十三條 死刑ノ執行ニ付テハ書記其始末書ヲ作り刑ノ

執行規則ニ從ヒ立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印ス可シ

其他刑ノ執行ニ關スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第四百六十四條 裁判言渡確定シ又ハ闕席裁判アリタル時ハ其

刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ書記既決犯罪表ヲ作り左ノ條件

ヲ記載ス可シ但大審院ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其執行

ヲ爲シタル裁判所書記之ヲ作ル可シ

一 犯人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地

二 罪名刑名

三 再犯

四裁判言渡ヲ爲シタル年月日

五對審裁判又ハ闕席裁判

第四百六十五條 既決犯罪表ハ二通ヲ作り一通ヲ司法省ニ送致

シ一通ヲ其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ

違警罪ノ既決犯罪表ハ一通ヲ作り其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ

第四百六十六條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者其言渡ノ條件ニ付キ疑

義ノ申立又ハ其執行ニ付キ異議ノ申立ヲ爲シタル時ハ刑ノ言

渡ヲ爲シタル裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ

第四百六十七條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡ノ後捕ニ就キタル

場合ニ於テ人違ノ申立アリタル時ハ之ヲ認定スル爲メ前ニ其

罪ヲ認メタル裁判所ニ送致ス可シ

裁判所ニ於テ本犯ナルヲ認定スルヲ能ハサル時ハ事實參考

ノ爲メ曾テ其事件ニ干預シタル裁判官檢察官書記又ハ原被ノ  
証人ヲ呼出スヲ得

第四百六十八條 前二條ノ場合ニ於テハ公廷ニテ刑ノ言渡ヲ受

ケタル者ノ申立及ヒ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判言渡ヲ爲ス可シ

但其言渡ニ對シテハ上訴ヲ許サス

第四百六十九條 賠償及ヒ訴訟關係人ニ償還ス可キ裁判費用ニ

付キ其言渡ノ執行ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第二章 復權

第四百七十條 復權ノ願ハ刑法第六十三條ニ定メタル期限經過

シ後刑ノ言渡ヲ受ケタル者ヨリ司法卿ニ之ヲ爲ス可シ

復權ノ願書ニハ本人署名捺印シ現ニ住スル地ノ始審裁判所檢

事ニ之ヲ差出ス可シ

第四百七十一條 復權ノ願書ニハ左ノ書類ヲ添フ可シ

一 裁判言渡書ノ謄本

二 主刑ノ滿期特赦又ハ期滿免除ト爲リタルコトヲ証明スル書類  
三 假出獄及ヒ假ニ監視ヲ免セラレタルノ証書

四 賠償及ヒ裁判費用ヲ辨濟シ又ハ其義務ヲ免カレタルノ証書  
五 過去現在ノ住所及ヒ生計ヲ記載スル書類

第四百七十二條 檢事ハ願人ノ品行其他必要ノ取調ヲ爲シ前條ノ書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ差出ス可シ

第四百七十三條 檢事長ハ更ニ必要ノ取調ヲ爲シ復權ノ願ニ關スル書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ司法卿ニ差出ス可シ

第四百七十四條 司法卿ハ復權ノ願ニ關スル書類ヲ檢閲シ其願ヲ允許ス可キ者ト認メタル時ハ速ニ上奏ス可シ

第四百七十五條 勅裁又ハ司法卿ノ意見ニ依リ復權ノ願ヲ棄却シタル時ハ司法卿ヨリ其旨ヲ控訴裁判所檢事長ニ通知シ檢事

長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢事ニ通知ス可シ

前項ノ場合ニ於テハ刑法第六十三條ニ定メタル期限ノ半ヲ經過スルニ非サレハ更ニ其願ヲ爲スコトヲ得ス

更ニ復權ノ願ヲ爲スニ付テモ亦前數條ノ規則ニ從フ

第四百七十六條 復權ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ其裁可狀ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢事ニ送致ス可シ

檢事ハ裁可狀ノ謄本ヲ願人ニ下付ス可シ  
又刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ裁可狀ノ謄本ヲ送致シ其裁判所ニ於テハ之ヲ裁判言渡書ニ記入ス可シ

第三章 特赦

第四百七十七條 特赦ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ檢察官又ハ監獄長ヨリ犯人ノ情狀ヲ具シ司法卿ニ申立ルコトヲ得



監獄長ヨリ特赦ノ申立ヲ爲ス時ハ檢察官ヲ經由ス可シ但檢察官ハ意見書ヲ添フ可シ

特赦ノ申立アリタル時ハ司法卿ヨリ其書類ニ意見書ヲ添へ上奏ス可シ

第四百七十八條 司法卿ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ特赦ノ申立ヲ爲ス可シ得

死刑ヲ除クノ外特赦ノ申立アリト雖モ刑ノ執行ヲ停止セス

第四百七十九條 特赦ノ申立棄却アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

第四百八十條 特赦ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ特赦狀ヲ送致ス可シ此場合ニ於テ

ハ第四百七十六條ノ規則ニ從フ

第一節 治罪法追告

○太政官第四十四號御布告

違警罪ノ審判ニ關スル一切ノ手續ハ治罪法ニ從フヘシト雖モ實際已ムヲ得サル場合ニ於テハ當分ノ内便宜取計ヒ其裁判言渡ニ付テハ總テ上訴ヲ許サス此旨布告候事

○同第四十二號御布告

公訴私訴ニ係ル控訴上告及ヒ証人呼出費用等ノ儀當分左ノ通相定候條此旨布告候事

刑事裁判所ノ裁判言渡ニ對シ訴訟關係人ヨリ控訴又ハ上告ヲ爲ス者アル時ハ原裁判所ニ於テ其訴訟費用ノ金額ヲ算定シテ之ヲ豫納セシムヘシ若シ豫納スル不能ハサル者ハ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ許サス

豫納者ハ公判ニ付証人ヲ呼出サント請フ者アル時ハ裁判所ニ於

テ其旅費日當等ノ金額ヲ算定シテ之ヲ豫納セシムヘシ  
若シ被告人旅費日當ヲ豫納スルノ資力ナキ時ハ治罪法第七十條  
ノ制限ニ從ヒ裁判所ニ於テ其費用ヲ立替置クヘシ

○同第四十六號御布告

書類送達ニ附治罪法第二十四條ノ制限有之候ヘトモ當分ノ内ハ  
不及其儀候事

治罪法第四十條ニ犯罪ノ地ヲ以テ裁判管轄ト規定有之候處當分  
ノ内ハ犯罪ノ地分明ナル被告人ト雖モ管轄裁判所ヨリ囑托アリ  
タル時ハ其被告人逮捕ノ地ノ裁判所之ヲ管轄スヘシ

治罪法第七十三條第二項ニ陪席判事四名ト有之候ヘトモ當分ノ  
内二名ト相定候事

治罪法第一百一條ニ准現行犯ノ場合列記有之候處其舉動犯人ト思  
料ス可キ者アル時ハ當分ノ内現行犯ニ准シ處分スルコトヲ得

治罪法第一百三十三條第三項ニ家宅搜索ノ制限有之候ヘトモ芝居  
人寄席飲食店湯屋遊船宿待合茶屋ノ類ハ日出前日没後ト雖モ其  
營業ヲ爲ス時間又ハ旅籠屋貸座敷ハ日出前日没後ニ拘ハラヌ搜  
索致シ苦シカラス

治罪法第六十八條第七十三條ニ於テ治安判事ニ囑託スルコ  
トヲ許シタル處分ハ當分ノ内其地ノ司法警察官ニモ囑託スルコト  
ヲ得

治罪法第二百五條第一項但書ニ司法警察官ハ令狀ヲ發スルコトヲ  
得サル旨記載有之候ヘトモ當分ノ内現行犯ノ場合ニ限リ令狀ヲ  
發シ苦シカラス

○第四十七號御布告

刑事裁判所ニ於テ被告人ヲ責附スルハ左ノ手續ニ從フヘシ此旨  
布告候事

治罪法追告

三百〇四

第一條 被告人ヲ責附スルニハ親屬又ハ故舊ヨリ何時ニテモ呼出ニ應シ出廷セシムヘキノ証書ヲ其裁判所書記局ニ差出カシムヘシ

第二條 責附中被告人ヲ呼出ストキハ出廷ヨリ二十四時前ニ其通知ヲ爲スヘシ

第三條 被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ責附ヲ取消スヘシ

○同第四十八號御布告

刑法治罪法中違警罪裁判所ノ儀ハ當分三府五港ノ市區ヲ除クノ外府縣警察署又ハ警察分署ニテ裁判可致候條此旨布告候事

○同第五十三號御布告

各裁判所ノ位置及ヒ管轄ノ區畫別表ノ通改正ニ明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事

三十八

○同第五十四號御布告

刑法治罪法實施ノ儀布告候ニ付テハ當分ノ内輕罪ニシテ檢察官ニ於テ豫審ヲ要セスト見込ムモノニ限り始審裁判所々在ノ地ヲ除クノ外治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開キ其裁判ヲ爲スヲ得ヘシ此旨布告候事

但本文ノ場合ニ於テ訟廷内治罪ノ手續ハ便宜可取計且其手續上ニ付テハ上訴ヲ許サス

○同第五十五號御布告

治罪法第七十三條末文陪席判事第七十九條第二項補充判事ノ儀當分其裁判所又ハ院長ノ臨時指定スル所ニ任シ候條此旨布告候事

○同第五十六號御布告

小笠原島裁判事務當分東京府出張所ニテ治安裁判所（即チ違警

治罪法追告

三百〇五

罪裁判所)始審裁判所(即テ輕罪裁判所)ノ權限ヲ以テ裁判セシメ  
民刑事控訴及重罪裁判ハ東京控訴裁判所ノ管轄ト相定明治十五  
年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事

但該島ニ於テ治罪ノ手續ハ適宜取扱フヘシ

○同第五十七號御布告

伊豆七島裁判事務當分該島吏へ民事ハ百圓以下及勸解并ニ刑事  
ハ違警罪ノ裁判ヲ委任シ民事百圓以上刑事輕罪以上ハ東京始審  
裁判所管轄ト相定明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事

○同第五十九號御布告

治罪法中豫審判事勾引狀ヲ發シ勾引セシメタル被告人ハ時宜ニ  
依リ其訊問期限四十八時間ニ在ル夜間ニ限り裁判所又ハ最寄警  
察署留置場ニ入置クヘシ此旨布告候事

○同第八十二號御達

司法官吏ヨリ巡查及ヒ兵員ヲ要求使用スルコハ左ノ手續ニ從フ  
ヘシ此旨相達候事

第一條 裁判官檢察官及ヒ司法警察官治罪法ニ從ヒ檢證及ヒ物  
件差押其他職務ヲ行フニ當リ必要ナル時ハ警察署又ハ憲兵屯  
營ニ照會シテ巡查又ハ憲兵卒ヲ使用スルコトヲ得

但時機緊急ナル時ハ直チニ之ヲ使用スルコトヲ得

第二條 前條ノ場合ニ於テ事緊急重要ニ涉ル時ハ直チニ鎖臺又  
ハ分營ニ照會シテ兵力ヲ要求スルコトヲ得

○同第八十六號御達

治罪法實施ニ付テハ大審院其他各裁判所公廷取締ノ使用ニ供ス  
タメ其院長所長ノ照會ニ應シ一名又ハ數名ノ巡查爲相詰又拘留  
被告人審問中ハ其護送ノ巡查或ハ押丁ヲシテ守卒トシテ公廷ニ  
入り看護セシムヘシ此旨相達候事

第三章 日本坑法

○明治六年七月廿日第二百五十九號御布告

第一章 坑物

- 第一 正理ヲ以テ論スルキハ凡ソ無機物タル物ハ生活ノ機ナキ諸物品都テ坑業ノ部分ニ關ス此ノ無機物品質二類ニ分ル即チ第一類ハ有鐵質第二類ハ無鐵質タリ凡ソ諸金屬ノ天然本質ヲ以テ出ル者或ハ他ノ物質ト合化シテ出ル者ハ右第一類ニ屬ス燃質物山鹽燐酸石炭美石及ヒ玉璞ノ類ハ右第二類ニ屬ス本條舉クル所ノ有鐵質無鐵質トモ總テ是ヲ坑物ト稱ス坑
- 第二 前ニ掲記セシ物類凡ソ日本國中ニ於テ發見スル者ハ都テ日本政府ノ所有ニシテ獨リ政府ノミ之ヲ採用スル分義アリ
- 第三 鑛石砂土粘土其他建築耕作所用ノ諸物品ハ都テ地主タル者ノ所有ト爲スヘシ

第四 日本ノ民籍タル者ニ非レハ試堀ヲ作シ坑區ヲ借リ坑物ヲ採製スル事業ノ本主或ハ組合人ト成ルヲ得ス坑産ノ割台及ル所ノモノハ若シ之ヲ犯ス者ハ其業ニ屬スル所有物ヲ官ニ沒入シテ其業ヲ禁止スヘシ

第二章 試堀

第五 試堀ヲ作サント欲スル者ハ鑛山寮ニ願出許可ヲ得テ之レヲ行フヘシ  
 試堀ヲ行フ爲メニ必要ノ地面他人ニ屬セハ其償金ヲ對談處分ス可シ  
 地主ニシテ自ラ試堀ヲ企ツル者ハ衆ニ超テ許可ヲ得ヘキ分義アリトス然レモ自ラ試堀ノ資本ナクシテ他人ノ舉ヲ拒ミ或ハ不當ノ償金ヲ貸ラハ鑛山寮或ハ地方官ニシテ正價ヲ裁決シテ其地ヲ買上シヘシ

第六 試堀ニテ坑物發見スルキハ直チニ見本ヲ添ヘテ鑛山寮ニ

届出ツヘシ且ツ試堀中ハ一月七月兩度毎ニ前六ヶ月間ノ行業

日數及ヒ工數並ニ產鑛量ヲ開報スヘシ

凡ソ產鑛ハ借區券ヲ第十款得ル後チニアラサレハ恣ニ賣却ス

ルヲ得ス若シ之ヲ背カハ其全價ヲ沒收スヘシ

第七 試堀ハ都テ一年間ヲ以テ期限トス若シ延期ヲ願出ルニ實

ニ未タ開坑ヲ決スルコトヲ得サル事理判然タラハ之レヲ許可ス

ルコアルヘシ

第八 試堀人廢業スルキハ第二十款廢坑則ノ如クスヘシ

此時ニ產鑛ハ鑛山寮ノ許可ヲ得テ賣却シ第三十一款ノ坑物稅

ヲ納ムヘシ

試堀人損失ニ因テ廢業スル事實判然タルニ於テハ坑物稅ヲ免

スルコアルヘシ

第三章 借區開坑

第九 開坑スル者ハマツ坑區ヲ得ヘシ坑區ノ廣狹ハ其適實ナル

起業ノ目途ニ應シテ之ヲ得セシムヘシ

有鑛質坑ヲ開ク者ハ必ス製鑛ノ業ヲ兼ヌヘシ

凡ソ借區開坑ハ鑛山寮ニ願出ツズシ此願書ニ其得ント欲スル

坑區ノ測量圖ヲ添ヘテ出ス可シ試堀ヲ經テ借區願出ル者ハ其

坑區中別ニ地主アリト雖モ之ヲ拒ムヲ得ス尤モ其處分ハ借區

券ヲ得ルノ後并ニ款ノ如クナルヘシ

第十 願出ノ借區ハ鑛山寮官員之ヲ驗測シ標石ヲ植テ境界ヲ識

別スヘシ

巡回官員歸報ノ後許可スヘキ工部全權ノ証印ヲ以テ借區券ヲ

附與スヘシ

第十一 凡ソ借區ハ通常十五年間ヲ以テ定期トス之ヲ終ルニ至

ヲ繼年期ハ新ニ願出スヘシ

第四章 通洞

第十二 通洞ハ坑道ハ縱横ニ小坑ヲ穿テ通常トス別ニ深鑛疎アリ之ヲ通水運輸等ノ爲メ地底ヲ横截シ一道ノ大坑ヲ穿ツ洞ト云フ我カ借區中ニアラスト雖モ之ヲ企ツルヲ得ヘシ此時ハ願書ニ目論見明細圖ヲ添ヘテ鑛山寮ヘ出スヘシ若シ其通洞他人ノ借區ニ亘渡スヘキハ豫メ其借區人ニモ報知スヘシ通洞ハ高九尺幅六尺ヨリ減スヘカラス是ヨリ小ナルハ通洞トセス

第十三 願出ノ通洞ハ鑛山寮官員實地勘踏歸報ノ後ヲ許可スヘキハ工部全權ノ證印ヲ以テ免狀ヲ附與スヘシ免狀ヲ得ルノ後ヲ若シ目論見圖ニ違ヒ方向ヲ轉シ或ハ距離ヲ延縮セント欲セハ更ニ鑛山寮ヘ願出許可ヲ得テ之ヲ行フヘシ

第十四 借區人何レモ自ラ通洞ヲ開クヘキ資本有ルニアラカレ

ハ我區中タリト雖モ他人ノ舉ヲ拒ムヘカラス

通洞保全ノ爲メニ其周圍ノ土石ヲ外ヨリ厚サ一間半以内ニ堀入ルヘカラヌ然レモ其跡ニ自己ノ入費ヲ以テ支柱ヲ構造シ崩潰ノ患ナカラシムル者ハ此限ニ在ラス是ハ鑛物ヲ得ンカ爲メ如キ是レ也一旦土石ヲ掘出スルノ

第十五 通洞ニ因テ諸借區人便利ヲ得ルヲアラハ通洞發起人ニ其謝金ヲ出スヘシ若シ之ニ就テ對談穩當ナラスハ鑛山寮ヨリ處斷スヘシ

通洞ヲ開ク者ハ借區人未定ノ所ニ於テハ通洞ノ周圍内ヨリ出ルタケノ鑛石ヲ取ルヲ得ヘシ他人ノ借區中ニ於テハ此鑛石ノ一半ヲ借區人ニ販スヘシ

第五章 坑業

第十六 都テ坑業ニ付テハ坑物ヲ坑中支柱ノ爲ニ存スヘキ所ノ

外ハ成ル丈坑利ヲ遺ス一ナシ取出スヘシ此法ヲ犯シ其他都テ坑ノ利用ヲ害スルモノハ其輕重ニ隨テ罰金ヲ徵ス可シ

第十七 試堀開坑或ハ通洞等ヲ企ルニハ舍屋鐵道河流及ヒ道路ノ如キ其害ヲ受クヘキ場所ハ度ヲ計テ之ヲ避ケ殊ニ城堡ハ七十間以内ノ地ヲ避クヘシ

凡ソ場所ノ主タル者應諾スルニアテスシテ此ヲ犯ス者有レハ城堡ハ其律ニ任シ餘ハ其損害ヲ償復スル一倍ノ費額ヲ取テ本費ハ其主ニ附與スヘシ

第十八 凡ソ初發許可ヲ得シ坑物ノ外ニ別種ノ坑物ヲ見出ス者ハ速ニ鑛山寮ニ報知スヘシ之ヲ背ク者ハ其坑物又ハ代價ヲ取揚クヘシ如此類ノ借區稅ハ第三十一條ニ照準シ高價ナル方ノ例ヲ以テ納ムヘシ

第十九 開坑人ハ歲々一月七月兩度毎ニ前六ヶ月間ニ產出セシ

坑物量其賣出高並ニ代價及ヒ行業日數工數ヲ具記シテ鑛山寮ニ報知スヘシ

有鑛質ハ坑產量並製出量且製出セシ混淆物二種以上ノ金屬ヲ含有スルハ其試驗ノ割合ヲモ具記シテ賣出高以下都テ前ノ如クスヘシ右量數不正或ハ閉報違期ノ罰ハ金五拾圓トス若シ賣出高並代價ヲ減盡スルモノハ其減盡セシ高ノ三倍ヲ徵收スヘシ

第二十 通例開坑又ハ廢礦ヲ採製スルニモ一年間ノ事業ハ地面五百坪ノ下ニ就テ壯健ナル工夫三百日ヲ以テ成セル程ノ工數ヨリ減スヘカラス若シ之ニ背ク者實ニ百方免レ難ク妨碍判然タルニアラスンハ其業ヲ禁止スヘシ

第二十一 坑業人ハ互ニ隣坑ノ風通シテ便利ニスヘシ且ツ甲區ヨリ乙區ノ地中ニ水道ヲ通シ地上ニ要路ヲ通セン一ヲ求ムル



ニ於テハ不當ノ償金ヲ貪ルヘカラス若シ相對ヲ以テ決セス  
ハ鑛山寮ヨリ處斷スヘシ

右堀通シニ付テ出ル鑛石ハ其所ノ借區人ニ屬スヘシ

第二十二 凡ソ借區人ハ區上ニ於テ藏庫詰所作事場洗鑛所鑛  
所通路等其他坑業ニ必要ナル地面ハ地主タル者ニ豫メ償金ヲ  
辨スヘシ若シ異論決セスハ鑛山寮或ハ地方官ニテ正價ヲ裁  
決シ其地ヲ買取ル可シ

第二十三 總テ坑區ヨリ隣區ニ患害損傷ヲ被ラシムルキハ之ヲ  
償フヘシ若シ償金決セスハ鑛山寮ヨリ裁決スヘシ

第二十四 凡ソ借區人其坑業ヲ年限中他人ニ讓渡ス如キハ前以  
テ双方ヨリ鑛山寮ニ願出許可ヲ請フヘシ若シ之ニ背ク者ハ其  
業ヲ禁止スヘシ

第二十五 凡ソ借區年限終リ又ハ法ニ背ヒテ其業ヲ禁止セラレ

或ハ自ラ廢業スルニ至ル者アレハ都テ其借區ハ政府ニ還復シ  
其事業ニ就テ如何ナル負債アリト雖モ總テ其坑山ニハ關係セ  
サル者トス此時ニ當テ地中ノ結構ハ坑山ニ屬シテ政府ノ有タ  
ルヘシ

地上ノ營造ハ其主ノ取去ルニ任スト雖モ其跡ノ地面ハ完全ニ  
修復ヲ爲スヘシ

第二十六 坑業人ハ其坑山地方ノ住民同様トス因テ其地方官ノ  
諸法令ヲ遵守スヘシ

第六章 廢業

第二十七 坑業ヲ廢セント欲スル者ハ堅坑ノ口ヲ掩ヒ又柵圍ヒ  
スヘシ鑛山寮ヨリ其堅坑ヲ當然ニ堅固ニセシヤ且坑内ノ營繕  
完全存在スルヤヲ檢査スヘシ若シ疎漏アラハ鑛山寮ニ於テ之  
ヲ繕治スヘキ費額ノ一倍ヲ徴収スヘシ

第二十八 鑛山寮ヨリ疏水ヲ命スルニ背キテ其事ヲ行ハス之カ  
爲メニ坑中廢没スルニ至ル者ハ其業ヲ禁止ス

第七章 製坑所建築

第二十九 凡ソ開坑人坑山外ノ場所ニテ有鑛質物ヲ製出セン爲  
メニ建築スヘキモノアラハ先ツ鑛山寮ニ許可ヲ請フヘシ

第三十 已ニ製煉セシ鑛物ヲ精製荒銅ヲ下銅棹銅ニ作り山吹金  
ヲ純金ニ製スル類ヲ云フ

スル職業ノ者ハ起業ヲ鑛山寮ニ報知シ六ヶ月毎ニ元鑛量並製  
出品量等ヲ具記シ鑛山寮ニ開報スヘシ

第八章 稅納

第三十一 (明治十四年九月二十二日第四十九號布告ヲ以テ第一  
項及ヒ第四項中改正シ而シテ第一項ノ結尾ニ但書ヲ追補ス乃  
チ左ノ如シ)

鐵ヲ除クノ外有鑛質物ヲ採取スル坑區ハ而積五百坪毎ニ一ヶ

年金壹圓ツ、借區稅トシテ毎年一月ニ其年一ヶ年分ヲ前納ス  
ヘシ 借區稅ハ地租

ニ關係セス 鐵及ヒ無鑛質ノ諸物品ヲ採取スル坑區ハ而  
五百坪ニ付前條ノ半高ヲ納ムヘシ即チ五拾錢トス但怠納者ハ  
借區券ヲ取揚クヘシ

廢坑ヲ採取スル坑區ハ而千坪ニ付常例ノ稅額ヲ納ムヘシ開坑  
區面五百坪廢鑛區面千坪トニ足ラサルモノハ總テ右面積ノ比  
例ニ隨テ納ムヘシ

借區初年ノ區稅ハ月割ヲ以テ借區券下付ノ節前納スヘシ

前書借區稅ノ外ニ探製セシ金屬及ヒ諸坑物ニ就テ代價百分ノ  
三ヨリ百分ノ二十マテ坑物稅トシテ每歲一月七月兩度ニ鑛  
山寮ニ納ムヘシ

但稅額ノ儀ハ其坑業ノ盛衰ニ隨ヒ鑛山寮ヨリ命スヘシ

第三十二 試掘開坑或ハ通洞等ニ付テ前後諸條款ニ記セル稅或

ハ罰金償金等ヲ納メサルハ其業ニ屬スル所ノ運移スヘキモノ  
殘ラズ鑛山寮ヨリ入札拂ニシテ代價ノ中ヨリ不納高ヲ引去リ  
其殘金ハ之ヲ本人ニ還付スヘシ

第三十三 凡ソ坑法ノ意旨ニ戾ル過失有ル者ハ輕重ニ隨テ罰金  
ヲ命スヘシ若シ事業疎略ニシテ人命ヲ失ハ、國律ヲ以テ論處  
スヘシ

右章款ニ記載スル方法ハ明治六年九月一日ヨリ施行スヘシ從前  
ノ法則及ヒ舊習等若シ此法ニ矛盾スル者ハ都テ廢停タルヘシ

坑法附示

坑法及ヒ製鑛ノ業ヲ舉行スル者西洋ノ學術及ヒ工作ヲ用ヒンカ  
爲メ一定ノ給料ヲ以テ外國技術家ヲ雇入ル、カ如キハ我坑產損  
益及ヒ所有物ニ關係スルコトナキニ因テ坑法第四款ノ禁ニ觸レス  
然レモ之ヲ雇入ル、以前其職業給料及ヒ年限ヲ分明ニ記載シ其

案紙ヲ鑛山寮ヘ送呈シテ結約ノ許可ヲ可請候事

第四章 改正區町村會法

○明治十七年五月七日太政官第十四號布告

明治十三年四月第十八號布告區町村會法左ノ通改正ス

區町村會法

第一條 區町村會ハ區町村費ヲ以テ支辨スヘキ事件及其經費ノ  
支出徵収方法ヲ議定ス

第二條 區町村會ノ會期、議員ノ員數、任期、改選及其他ノ規則  
ハ府知事縣令之ヲ定ム

第三條 區會ハ區長之ヲ招集シ其議案ヲ發ス町村會ハ戶長之ヲ  
招集シ其議案ヲ發ス

第四條 區會ノ評決ハ區長之ヲ施行シ町村會ノ評決ハ戶長之ヲ施行ス若シ其評決ヲ不當ナリトスルトキハ其施行ヲ止メ府知事縣令ニ具狀シテ指揮ヲ請フヘシ

第五條 區長ニ於テ區會郡區長戶長ニ於テ町村會ノ議事若シ法ニ背キ又ハ治安ヲ害スルコトアリト認ムルトキハ其會議ヲ中止シ府知事縣令ニ具狀シテ指揮ヲ請フヘシ

第六條 府知事縣令ニ於テ區長村會ノ議事若シ法ニ背キ又ハ治安ヲ害スルコトアリト認ムルキハ何時タリトモ區町村會ヲ停止シ又ハ之ヲ解散シテ改選セシムルコトヲ得

第七條 前條ノ場合ニ於テ停止又ハ解散ヲ命シタルトキハ更ニ開會ヲ命シ又ハ改選スル迄ノ間區長戶長ハ經費ノ支出徵収方法ヲ定メ府知事縣令ノ認可ヲ得テ施行スルヲ得

第八條 區町村ニ於テ議員ヲ選舉セス又ハ議員招集ニ應セスシ

テ會議ヲ開クヲ得ス及議定スヘキ議案ヲ議定セス又ハ會期内ニ於テ議案ヲ評決シ終ラサルキハ前條ノ例ニ依ル

第九條 議員ヲ選舉スルヲ得ヘキ者ハ滿二十歳以上ノ男子ニシテ其區町村ニ住居シ其區町村内ニ於テ地租ヲ納ムル者ニ限ル但府縣會規則第十三條第一款第二款第三款ニ觸ル、者及陸海軍々人規役ノ者ハ選舉人タルコトヲ得ス

第十條 議員タルコトヲ得ヘキ者ハ滿二十五歳以上ノ男子ニシテ其區町村内ニ住居シ其區町村内ニ於テ地租ヲ納ムル者ニ限ル但府縣會規則第十三條第一款第二款第三款第四款ニ觸ル、者ハ議員タルコトヲ得ス

第十一條 區會ノ議長ハ區長町村會ノ議長ハ戶長ヲ以テ之ニ充ツ區長戶長若シ事故アルトキハ區長戶長ニ於テ議員中ヨリ議長ヲ指定スルコトヲ得

改正區町村會法

三百二十四

第十二條 府知事縣令其管轄内ニ於テ町村會ヲ開設シ得ヘカラサル狀況アルヲ認ムルトキハ内務卿ニ具狀シテ指揮ヲ請フヘシ

第十三條 府知事縣令ハ數區町村ニ關涉スル事件アルトキ其區域ヲ定メテ聯合區町村會ヲ開設スルコトヲ得

第十四條 府知事縣令ハ水利土功ニ關スル事項ニシテ區町村會若シハ聯合區町村會ニ於テ評決スルヲ得サルモノアルトキ特ニ其區域ヲ定メテ水利土功會ヲ開設スルコトヲ得

第十五條 聯合區町村會及水利土功會ハ總テ本法ニ準據ス區域其區長戶長數人ノ所轄ニ涉ルモノハ府知事縣令便宜郡區長ヲシテ之ヲ管理セシム但戶長ヲシテ其評決ヲ施行セシムルコトアルヘシ

右奉 勅旨布告候事

▲第一節 全 類別

○明治十七年五月七日太政官第拾五號布告

區町村會ニ於テ評決シタル區町村費及ヒ水利土功會ニ於テ評決シタル土木費ノ怠納者ハ總テ明治十年〔十一月〕第七十九號布告ニ據リ處分ス可シ若シ財産公賣ノ際買受望人ナキトキハ官沒ノ手續ヲ爲サス郡區長又ハ戶長ニ於テ之ヲ管掌シ會議ノ評決ヲ取リ府知事縣令ノ認可ヲ得テ處分ス可シ。但明治十四年〔四月〕第廿四號布告ハ廢止ス

右奉 勅旨布告候事

○明治十七年五月七日太政官第四十一號達

府縣 沖繩縣  
戶長ハ府知事縣令之ヲ選任ス但町村人民ヲシテ三人乃至五人ヲ選舉セシメ府知事縣令其中ニ就テ選任スルコトヲ得ヘシ此旨相達候事

改正區町村會法

三百二十五

○明治十七年五月七日内務省乙第貳拾五號達 府縣 沖繩縣  
 本年第四拾壹號公達ニ依リ町村人民ヲシテ戸長ヲ選舉セシムル  
 トキハ其選舉方ハ區町村會議員選舉ノ例ニ照準ス可シ此旨相達  
 候事

第五章 利息制限法

○明治十年九月十一日第六拾六號布告

第一條 凡ソ金銀貸借上ノ利息ヲ分テ契約上ノ利息ト法律上ノ利息トス

第二條 契約上ノ利息トハ人民相互ノ契約ヲ以テ定メ得ヘキ所ノ利息ニシテ元金百圓以下ハ一ケ年ニ付百分ノ二十〔二割〕百圓以上千圓以下百分ノ十五〔壹割五分〕千圓以上百分ノ十二〔壹割貳分〕以下トス若シ此制限ヲ超過スル分ハ裁判上無効ノモノトシ各其制限ニマテ引直サシムヘシ

第三條 法律上ノ利息トハ人民相互ノ契約ヲ以テ利息ノ高ヲ定メサルモ裁判所ヨリ言渡ヌ所ノ者ニシテ元金ノ多少ニ拘ハラズ百分ノ六〔六分〕トス

第四條 第二條ニ依リ定限利息ノ外總テ人民相互ノ契約ヲ以テ禮金棒利等ノ名目ヲ用ル者アルモ總テ裁判上無効ノ者トス

第五條 返還期限ヲ違フルモハ負債主ヨリ債主ニ對シ若干ノ罰金罰金違約金科料等ヲ差出スヘキヲ約定スルコトアルモ概シテ損害ノ補償ト看做シ裁判官ニ於テ該債主ノ事實受ケタル損害ノ補償ニ不當ナリト思量スルモハ之ニ相當ノ減少ヲ爲スコトヲ得

▲明治十三年七月七日司法省丁第十三號達

利息制限外ノ質入證書ニ戸長公証ノ件ニ付別紙ノ通法制部ヨリ  
通達有之候條爲心得此段相達候事

別紙

法制部ヨリ通達〔明治十三年六月廿三日〕

利息制限外ノ質入證書ニ戸長公證ノ件ニ付舊法制局ヨリ及説明  
置候處今般閣裁ヲ以テ左ノ通熊本縣ニ及回答候條爲心得此段及  
通達候也

法制部ヨリ熊本縣へ回答

戸長ハ地所家屋等ノ書入質入ヲ公証スルノミニシテ利息ノ制限  
ニ超ユルト否トニ關セサルモノトス

第六章 戸籍法

○明治四年四月四日太政官布達

第一則 戸籍舊習ノ錯雜アル所以ハ族屬ヲ分ツテ之ヲ編制シ地

ニ就テ之ヲ收メサルヲ以テ遺漏ノ事アリト雖モ之ヲ檢査スル

ノ便ヲ得サルニ依レリ故ニ此度編製ノ法臣民一般（華族士族  
卒祠官僧

以下准之）其住居ノ地ニ就テ之ヲ收メ專ラ遺スナキヲ旨

トス故ニ各地方土地ノ便宜ニ隨ヒ豫メ區畫ヲ定メ每區戸長並

ニ副ヲ置キ長並ニ副ヲシテ其區内戸數人員生死出入等ヲ詳ニ

スル事ヲ掌ラシムヘシ

第二則 戸長ハ必ス長ト副トニ限ルヘカラス時宜ニヨリ長副數

名アルモ妨ケナシトス

但戸長ノ務ハ是迄各處ニ於テ莊屋名主年寄觸頭ト唱ル者等  
ニ掌ラシムルモ又ハ別人ヲ用ユルモ妨ケナシ

第三則 凡シ區畫ヲ定ムル營ハ一府一郡ヲ分テ何區或ハ何十區トシ其一區ヲ定ムルハ四五町若クハ七八村ヲ組合スヘシ然レモ其小ナルモノハ數十ニ及ヒ大ナルモノハ一二ニ止ルモ都テ其時宜ト便利トニ任セ妨ケナシ  
(華族士族住居ノ地從前武家ル素ヨリ)  
(地屋敷地ト唱ル類モ同様云ヲ待ス)

但急ニ區畫ヲ定難キ所ハ假ニ便宜ニ從ヒ一村一町ニテ檢査セシムルモ妨ケテシ官ノ學校兵隊屯所等又ハ大社大寺ノ別ニ區域ヲナセシハ其官司ノ吏員其社寺ノ執事等ニテ戶長ノ事ヲ扱ハシムルモ妨ケナシ

第四則 戶長其區内ノ戶籍ヲ式ノ如ク之ヲ集メニ通テ清書シ更ニ第一號ト第二號ノ式ノ如ク其區内總計ノ戶籍表ト職分表トヲ作り其集ル所ノ籍ハ戶長ニ備ヘ置キ清書ニ通ト共ニ其支配人ニ差出スヘシ支配所之ヲ其廳ニ差出スヘシ其廳之ヲ第五號

第六號ノ式ノ如ク其管内總計ノ戶籍表ト職分表トヲ作り戶籍一通ハ其廳ニ備ヘ置キ一通ニ應印ヲ押シ表ト共ニ六ヶ年目ニ改メ太政官ヘ差出スヘシ  
(支配所トハ管轄内廣遠ノ處別ニ一總テ出張所トイフノ類ナリ)  
(小部ヲ置キ支配セシムル所ヲ云フ)

但支配所ナキ時ハ直ニ其廳ニ出スヘシ以下准之  
 第五則 編製ハ爾後六ヶ年目ヲ以テ改ムヘシト雖モ其間ノ出生死去出入等ハ必ス其時々戶長ニ届ケ戶長之ヲ其廳ニ届ケ出テ(支配所アルモノハ支配所ニ届ケ支配所ヨリ其廳ニ届ケ)其廳之ヲ受ケ人員ノ増減等本書ヘ加除シ毎年十一月中戶籍表ヲ改メ十二月中太政官ヘ差出スヘシ  
(加除ハ生ル、モノト入ルモノヲ加)  
(死者ト出ルモノヲ除ク類ヲ云フ)

第六則 管轄廳ニ於テ戶籍專任ノ吏員ヲ其事ニ擔當セシムヘシ若シ遺漏粗略ノ事アルニ於テハ其吏員並ニ戶長(戶長ナキ大社大寺ハ執事)ノ責タルヘシ



第七則 区内ノ順序ヲ明ニスルハ番號ヲ用ユヘシ故ニ毎區ニ官私ノ差別ナク臣民一般番號ヲ定メ其住所ヲ記スニ都テ何番屋敷ト記シ編製ノ順序モ其號數ヲ以テ定ルヲ要ス

但区内ノ屋敷亡所トナリ又ハ一戸ヲ割テ二戸トシ二戸ヲ合セテ一戸トナスコアルモ其由ヲ戸籍ニ記シ番號ハ其儘据置六ヶ年目ニ至リ改ムヘシ

第八則 各地方官屬或ハ平民等事務アリテ全戸他ノ管轄所ニ引移ルモノハ其由ヲ本貫管轄廳ヘ願出其廳ヨリノ送りヲ取り在留地ノ廳ニ届ケ出其所ノ籍ニ編入スヘシ又故アリテ元ノ管轄所ヘ引移リシ時ハ之ヲ戻スコ其始メ出ル時ノ如クシ其所ノ籍ニ編入スヘシ

但當時全戸既ニ引移リシ官員ノ如キハ其官省ヨリ名前書ヲ在留地ノ廳ニ達シ夫ヲ證トシ其住居ノ地區ニテ其籍ヲ收ム

ヘシ又本貫管轄廳ニハ其由ヲ其官省ヨリ達シ其廳之ヲ聽キ其所ノ籍ヲ除クヘシ尤此ヨリ後引移ルモノハ此限ニアラス送籍スルコ本條ノ如クシ(第八則)若シ全戸引移ルト雖モ情故アリテ本貫管轄廳ノ籍ニアルヲ願フモノハ其地寄留ノ部ニ入レ情願ニ任スルモ妨ケナシ

第九則 他ノ管轄地ニ引移ル時元ノ廳ヨリ送籍スルニハ元住所ノ組合並ニ戸長ニ其由ヲ届ケ長副連印シ其廳ニ届ケ其廳之ヲ受ケ其廳知ルノ證ヲ押シ當人ニ渡スヘシ但管轄内廣遠ノ場所別ニ支配所アラハ其支配所ニテ之ヲ達セシメ往來困却ノ弊ナカラシムルコヲ要ス

第十則 他ノ管轄所ヨリ此管轄所ニ入籍スルモハ元ノ管轄所ノ證ヲ持參シ其入ル所ノ戸長ニ其由ヲ通シ戸長其相違ナキヲ糾シ其所ノ籍ニ入ルヘシ而シテ戸長其元廳ノ證ト其入籍セシ事

ノ由テ時々其應ニ届クヘシ

第十一則 管轄内甲ノ區ヨリ乙ノ區ニ移ルカ如キモ第八則ヨリ

第十則迄ノ例ヲ見合スヘシ

但管轄内ナルヲ以テ送籍ハ戸長ヨリ之ヲ致シ入籍ノ上其入

ル所ノ戸長ヨリ其應ニ届ケ其應之ヲ聽キ則チ本書ニ加除ス

ヘシ(加除ハ甲ノ籍ヲ除キ乙ノ籍ニ入ルノ類ヲ云フ)

但其區ニ於テ時々加除スルハ亡論ナルヘシ

第十二則 全戸引移ラス又ハ一時公私ノ用ニテ寄留スルモノハ

其本貫管轄領鑑札ヲ持參シ寄留地戸長ニ通シ其寄留スル所ノ

應ニ名前書ヲ添ヘ鑑札ヲ差出シ其應之ヲ受ケ即チ其應ノ鑑札

ト引替遣スヘシ(鑑札ニハ常人名住所職分ヲ記スヘシ)而シテ

其者歸國スル節ハ同様ノ例ヲ以テ元ノ鑑札ト引替歸國スヘシ

但管轄内廣遠ノ場所別ニ支配所アラハ其支配所ニテ引替シ

ムヘシ故ニ鑑札ハ豫メ支配所ヘモ備ヘ置クヲ要ス鑑札引替ノ

節其戸長(官ノ學校兵隊屯所ノ如キ)ニ差出ス名前書ニハ官目

ハ當人兵隊ハ隊長証印シ自餘ハ戸主傭主請人等証印スルヲ要

ス(名前届書式ハ第三號見合スヘシ)

第十三則 修行又ハ奉公ノ爲メ他國ニ寄留スルモノモ第十二則

ノ例タルヘシ

全戸引移リシ官員等ノ内寄留情願ノモノモ第十二則ノ例タル

ヘシ(第八則但書見合スヘシ)

但是迄修行ハ奉公イタシ寄留スル者及ヒ事務アリテ寄留ス

ルモノ其本貫ノ應ニ届ケ鑑札請取第十二則ノ例ヲ以テ引替

ヘシ若シ道路懸隔リ當人ヨリ本貫ノ應ニ届ケ難キ事故アル

モノハ其寄留地ノ應ニ於テ戸主傭主請人等ノ証書ヲ出サシ

メ其應ヨリ直ニ其本貫ノ應ニ掛合鑑札受取ヘシ

但自今以後ハ此例ニテラス

第十四則 凡ソ旅行スルモノ官員ハ其官省等ノ鑑札ヲ所持シ自餘ハ臣民一般其管轄ノ鑑札ヲ所持スヘシ（寄留ノモノハ其所持スル鑑札ヲ用ユ）故ニ旅行ヲ以テ渡世トスルモノ、如キハ急速ノ便ヲ得ル爲メ豫メ其鑑札ヲ申受ケ置クモ妨ケナシトス（但十二則但書速ノ便ヲ得セシムヘシ）

但其管轄廳ノ鑑札ニハ當人名住所ト職分トヲ記スヘシ名住所職分ヲ變セシキハ右鑑札ヲ引替ヘシ

第十五則 驛遞旅宿ニ於テハ其鑑札ヲ認メ之ヲ宿帳ニ記シ止宿セシムヘシ此証據ナキモノハ止宿セシムヘカラス

第十六則 宿帳ハ七月目毎ニ驛遞ハ其驛出張驛遞掛ノ改ヲ受ケ自餘ハ其戸長ヘ出シ改ヲ受クヘシ旅籠屋ニ限ラス都テ逗留三日以上ハ其戸長ヘ届ケ（人民幅濶スルニ都府ノ如キハ）九十日（其時々戸長ヨリ其廳ニ届ヘシ）

四十二

以上ハ寄留トシ第十二則ノ手續ヲナスヘシ旅人病氣又ハ異變ノ節ニ届ケ出ルハ勿論ナリ

但戸籍改ノ節滞留スルモノハ其所持ノ鑑札ニ突合セ検査スヘシ

第十七則 各地ニ出張スル官員出入トモ其管轄廳ヘ届ケ其出張先ノ地方廳ヘモ届クヘシ

但地方ノ廳懸隔リシ場所一時出張シ或ハ急速ノ事務等アルハ其手續ナキコアルヘシ

第十八則 僧侶ハ其得度ノ地ヲ以テ本貫トシ他寺ニ轉住スル時ハ送籍シ行脚遍參スルモノハ寄留地ニ於テ鑑札引替ル事等第十二則ノ例タルヘシ

第十九則 鑑札ヲ所持シテ出奔死亡シ或ハ刑ニ處セラレ歸國セサルモノ其所ノ官司ヨリ其由ヲ本貫ノ廳ニ達シ鑑札ヲ送り遷

スルシ

第二十則 六ヶ年目毎ニ戸籍ヲ改ムルニ當テ其戸籍取集メシ上  
 ハ日限ヲ定メ其區々ニ於テ長並副區内一戸毎ニ其差出ス處ノ  
 戸籍ニ現在ノ人員ニ突合セ相違ナキヲ點檢スルヲ以テ法トス  
 ヘシ

寄留ノモノハ曾テ届ケ出シ名前書ヲ以テ人員及ヒ所持ノ鑑札  
 ナ突合セ相違ナキヲ証スルヲ以テ法トスヘシ  
(凡テ寄留ノモ  
 前第十二則第十三則ノ例ニ從ヒ  
 鑑札ヲ受ケ名前書ヲ差出置ヘシ) 氏神ノ守札モ其時臨檢スヘ  
 シ

但其土地ノモノニテ其土地ニ修行又ハ奉公シテ他家ニアル  
 モノハ戸籍改ノ日限ニハ歸宅シテ改ヲ受クヘシ若シ儘ナル  
 証據アリテ其日限ニ歸宅シ難キモノハ其証據ヲ以テ證トス  
 ルモ不得己ヘシ

第二十一則

凡ソ戸籍ヲ檢査スルハ遺漏アルヘカヲ又重複ス  
 ヘカヲスニツノ者ノ弊アレハ檢査ノ要ヲ失フ尤甚シトイフヘ  
 シ故ニ戸長ヲ設ケ地ニ就テ戸籍ヲ收ムルハ遺漏ノ弊ヲ防ク所  
 トイヘトモ其戸籍ヲ出入スルニ當リテ  
(出入ハ他ノ管轄内ヲ  
 ノ區ヲ出乙ノ區  
 ニ入ル類ヲ云フ) 深ク注意セサレハ又重複ノ弊ヲ免ル能ハス  
 故ニ六ヶ年目毎ニ戸籍ヲ改正スルニ當リ其戸籍ヲ檢査スルノ  
 日ハ天下府藩縣一般二月一日ヨリ五月十五日ヲ以テ終ルヲ法  
 トスヘシ  
(此間凡  
 百日)

第二十二則

六ヶ年目毎ニ二月一日ヨリ五月十五日迄凡百日ノ  
 間ハ戸籍ノ出入ヲ止ムヘシ

但不得止事故アルニ由リ其人ハ移轉セシメ他ノ所ニ行カシ  
 ムト雖モ戸籍ノ調ハ其本住所ノ廳ニテ之ヲ取集ムヘシ此百  
 日ノ間ニ一般ノ戸籍調終ルヲ待テ五月十六日ヨリ送籍入籍

ノ事ヲ所置スヘシ

但戸籍検査ノ日ニ當リ(二月一日ヨリ五月十  
五日迄凡百日ノ間)不得已移

轉セシモノハ送籍入籍ノ時(五月十六  
日ヨリ)必ス其由ト其月

日トナ本書ニ書顯スヘシ

第二十三則 六ヶ年毎ニ五月十六日迄ニ戸籍検査既ニ終リ其屬

ニ於テ六月中第四則ノ例ノ如ク其官轄内總計ノ戸籍表ヲ作り

(第五號式)本署共ニ七月中太政官へ差出スヘシ(第四則ト見  
合スヘシ)

但一紙ハ其應ニ留置毎年出ス所ノ表ヲ基トスヘシ

第二十四則 寄留者ノ届書ハ其寄留スル支配所ニテ(支配所ナ  
キモノハ

其)其時々之ヲ記録シ寄留表ヲ第七號式ノ如ク製シ出入人員

増減ヲ隔月検査シテ其應ニ出シ其應之ヲ受ケ毎年十二月太政  
官へ差出スヘシ

但支配所アルハ某支配所ト表ノ左傍ニ記スヘシ

第二十五則 三都府ハ人民輻湊ノ地ナルヲ以テ寄留表ハ他ノ藩

縣ニ拘ハラズ隔月検査ノ時々即チ太政官へ差出スヘシ

第二十六則 民産調ノ如キハ一般ノ御布告アルヘシト雖此迄

地方官ニテ戸籍中家産等書載サセ來リシハ其儘出スヘシ

第二十七則 戸籍表ノ用紙ハ厚紙ヲ用ヒ戸籍ノ用紙ハ美濃紙ノ

寸法ヲ準トシ公用ノ郵紙ヲ用ユヘシ戸長ト其應へ收ムル分ハ

其土地求メ易キ適宜ノ品ヲ用ユヘシ故ニ每區戸長へ本書分ノ

公用郵紙ヲ其屬ヨリ下ケ渡スヘシ

第二十八則 各地ノ戸籍一例ナルヲ要スレハ字ノ細大行ノ高低

ハ其記事ヲ標別スル爲メナルヲ以テ能々注意シ成丈ケ細字ニ

記スルヲ要ス

第二十九則 此迄厄介ト號セシモノ或ハ縁故アリテ養育ズルモ

ノ等ハ其族屬ト續柄ヲ肩書ニシ其事由ヲ其名前ノ上ニ記スル  
式ノ如クスヘシ

第三十則 華族等ノ從僕其邸内ニ住居シテ一戸ヲナセルモノハ  
式ノ如ク其主人ノ次ニ記シ社中寺内ニアルモノ此例ニ準スヘ  
シ

第三十一則 凡ソ僧尼ハ皆式ニ依テ其本世得度ノ年月及ヒ其所  
ヲ記シ院内受職ノ外ハ皆弟子ヲ以テ記スヘシ

第三十二則 穢多非人等平民ト戸籍ヲ同フセル者ノ如キハ其最  
寄ノ區ニテ其戸長へ名前書ヲ出サセ（年齢癡疾等ヲモ認ムヘシ）其人員男  
女ヲ分チ戸籍表ニ書入レ差出シ廳ニテモ戸籍表ニ入ル、式  
ノ如クスヘシ

但生死出入其最寄戸長ニテ取扱寄留旅行ノ規則等平民同様  
ノ例ニ從ヒ名前書ヲ六ヶ年目ニ出サシムルコト戸籍ノ如クス

ヘシ

第三十三則 都テ書式ハ臣民トモ體裁一ナレハ彼此相通シ參用  
妨ケナシ （書式畧ス）

第一節 戸籍類則

○任官平民ノ家族取扱方

（達）五年十一月八日 平民任官ノ者勅奏判ヲ不論本人在官中ハ  
子孫ニ至ル迄士族ヲ以テ可取扱事

○家士族家督願中病死届出方

（達）四年九月 華士族ニ不拘病氣危篤ニ付家督相續願中死去候ハ  
願濟ヲ不待直ニ可届出事

○華士族平民婚姻及養子取組

（布告）四年八月 華族ヨリ平民ニ至ル迄互婚姻被差許候條雙方  
不及願其時々戸長へ可届出事

但シ送籍方ノ儀ハ戶籍法第八則ヨリ第十一則迄ニ照準可致事

(布告) 六年一月廿二日 第二十七號

自今華士族平民互ニ養子取組不苦候事

但華族ハ管轄廳ヨリ正院へ伺出土族ハ管轄廳ニテ聞届平民ハ戶長へ可届出事

○華士族ノ子弟厄介分家等民籍編入

(達) 五年四月九日 第百拾五號

自今華士族子孫厄介ノ輩民籍へ加入爲致候儀可爲勝手事

(布告) 七年七月十日 第七十三號

自今華士族分家ノ者ハ平民籍ニ編入候條

此旨布告候事

但分祿ノ義ハ不相成其宗家祿高ノ中適宜給與候義勝手タルヘキ事

○僧尼族籍編入及取扱方

(布告) 七年七月十日 第七十四號

今般華士族分家候者ハ總テ平民籍ニ編入

相成候ニ付本年一月第八號僧尼族籍編入ノ布告自今左ノ通更定候條此旨僧侶へ布告スヘキ事

一 僧尼ノ輩族籍被相定候條各自ノ原籍ニ復スヘキ事

一 原籍不分明又ハ復籍ヲ望マサル者ハ現在地へ別ニ本籍相定若シ現在地ノ外へ本籍相定度望ノ者ハ一旦現在地へ定籍ノ

上其地ヨリ望ノ地へ送籍スヘシ

但別ニ本籍相定候者ハ元躬分ニ不拘總テ平民籍タルヘキ事

一 眞宗 維新以來華族ニ列セ  
ヲレン者ヲ除クノ外 并ニ舊修驗等世襲ノ者モ一般平民タルヘキ事

本末寺共其住職タル者宗教事務管理ノ儀一般職分同様タ

ルヘキ事

但一寺住職ノ者ハ平民タリ共總テ身分取扱士族ニ準シ候儀ハ從前ノ通タルヘキ事

一戶籍法中右等ニ抵觸ノ廉ハ總テ廢止候事

(布告) 九年十二月十六日

僧尼ト公認スル者ハ諸宗教導職試補

以上ニ限リ候條此旨布告候事

(內達) 八年十一月十七日

僧尼ノ輩定籍ノ儀ニ付昨七年第七十

四號ヲ以公布相成候處各自原籍ニ復スル分ハ格別現在地ヘ本籍ヲ定ムルニ至テハ自然地方區々ノ處分ニ相涉リ候テハ不都合ニ付左之通相心得速ニ可致編籍此旨僧尼ヘ布達スヘキ事

心得方

一原籍不分明又ハ復籍ヲ望マサル者ハ現今住所ノ區内ヘ別ニ本籍可相定尤本籍ヲ定ムルニ付更ニ土地及ヒ家屋ヲ設クル

ニ及ハス現住地ノ區内助村ヘ定籍スヘシ若シ現住地ノ區内助村ノ外ヘ本籍ヲ定度望ノ者ハ一旦前條ノ如ク原籍ノ上其地助村リ望ノ地ヘ送籍スヘキ事

但別ニ本籍ヲ定ムル者ハ身分ノ儀ハ昨七年第七十四號公布ノ通タルヘキ事

○脱籍無産ノ者復籍取扱方

(達) 四年四月廿三日

脱籍無産ノ輩復籍ノ御規則昨午年九月被相定候處別紙ノ通更ニ被仰出候條各地方官ニ於テ右御規則ニ隨ヒ送受方可取計候事

別紙

規則

第一條 脱籍無産ノ輩其本貫ニ復歸セシムルハ士民ニ不拘當人脱籍ノ始末及ヒ生所本籍等篤ト取糺シ申口慥ナルハ其ノ者本



貫へ引渡候譯添狀ニ認メ家族トモ府藩縣送リテ以テ差立當人中口ノ趣精細ニ書取其本廳へ可申達尤モ一昨已年四月脱籍ノ者復歸ノ儀被仰出候以前逃亡ノ者ハ本罪ヲ差免其以後ノ者ハ新律ニ依テ所置申付候上可引渡若シ歸國ノ上取糺生所其外最前ノ申合偽言ノ次第モ有之候ハ、其事輕キハ相當ノ處置申付更ニ其本籍ノ地方へ引渡方可取計事

但生所本籍等中口不分明ノ分ハ一應本廳へ掛合ノ上引渡方可致候事

第二條 脱籍ノ者稼方ノ爲メ一時歸國ヲ不望モノハ其ノ本籍へ掛合原籍へ復シ候上其儘出稼人ト致シ夫迄居付候地へ差置候儀ハ不苦又其者居付候地へ入籍致シ度望ノ者ハ同様掛合ノ上人別ノ送渡ヲ致シ本人望ノ地へ新ニ入籍セシメ一戸ノ新籍ヲ立候トモ又ハ親屬等ノ厄介ト相成候トモ都合次第可取計事

第三條 元來迷兒棄兒等ニテ生所不相分者ハ夫迄居付候地ノ籍へ編入可致事

第四條 脱籍ノ者引渡ノ入費ハ一昨已年四月以前逃じノ者ハ送立候迄ノ入費ハ其地方官道中ノ入費ハ道筋地方官ニテ相賄都テ官費ニ相立其以後ノ分ハ假令ヒ除籍致シ候トモ右入費其家又ハ親族ニテ難儀ハ其町村ヨリ可爲差出候事

但午九月被仰出候御規則ニテハ有籍ノ者引渡入費ハ其ノ親族等ヨリ償ハセ候筈ニ付其ノ以來御規則ノ通取計候内若已四月以前脱籍ノ者有之候ハ、其分ハ償金可戻遣候事

第五條 右入費償ノ分取立方ハ旅籠渡船人足賃等道筋地方官繰替ノ分ハ宿村一帳ニ記シ繼送留マリ宿ヨリ其ノ本廳へ差出右差立迄ノ費用ハ送方ノ地方官ヨリ其ノ本廳へ申立總テ入費ハ常人歸國ノ上本廳ニテ取立夫々可致償却候事

第六條 旅籠料ハ士民ノ差別ナク一人ニ付泊白米四合銀五匁晝  
白米二合銀二匁五分ヲ以テ取賄病者ハ宿駕手當致シ自分難持  
越荷物ハ人足ニテ送遣シ可申候事

但シ道中添之者差出可申候事

第七條 士卒平民其外其脱走ノ者有之節ハ早速其筋ハ届出其親  
族組合等ニテ精々探索致シ六ヶ月毎ニ摸檢申立三十六ヶ月ヲ  
過尋得不申候ハ永意申付除籍致シ候儀ハ不相成候事

第八條 各地方官ニ於テ處置濟ノ者モ都テ同様ノ手續ヲ以テ引  
渡方可取計事

第九條 復籍相成候輩ハ生業相立候様地方官ニ於テ世話可致遣  
事

但右授産ニ付官費有之節ハ伺ノ上取計可申候事

○復籍人遞送手續

(内布) 七年六月十七日

甲第拾四號

復籍宿村送ノ者其管廳マテ送届往々不

便ノ儀相聞候ニ付自今其差送候管廳ヨリ可請取管廳へ遞送狀  
相添其本籍地ノ區戶長へ引送區戶長之ヲ受取遞送狀及ヒ宿村  
繰替帳等其管轄廳へ差出復籍可取計此旨布達候事

○脱籍無産ノ徒懲役期滿使役

(達) 五年四月七日

第百十二號

脱籍無産徒復籍爲致候テモ生業難相立者ハ

府縣送リテ差止メ獄刑ニ處スルコト不及其地徒場ニ差遣シ罪人  
ト區別ヲ立テ追テ獨立活計相立候ハ、望ノ地へ入籍爲致候様  
先般御布告相成居候處今般懲役法被相設候ニ付本罪可受ノ日  
數ハ懲役ニ服シ期限滿テ猶徒場ニ留メ罪人ト別異シ其身相當  
ノ使役申付置餘ハ從前御布告ノ通可取計事

(内布)

七年九月二十日

○復籍人及旅行倒死人ノ諸入費并遺物處分方

甲第貳拾四號

自今府縣遞送人途中逃亡又ハ病死等致

候者其他旅行病人倒死人變死人等ノ諸入費總テ有籍者ハ其家元ヨリ償却爲致無籍者ハ官費ニ可相立此旨布達候事

但家元ヨリ償却方其家貧窮或ハ斷滅ニテ償費相成兼候ハ、父子兄弟ノ内ヨリ可相償若父子兄弟無之歟又ハ有之トモ貧窮等ニテ償費行届兼候ハ、其地方區内割ニ可取計其他従前布令ノ通可相心得事

(内達) 七年十月四日 府縣遞送入費總テ償却可致分ハ其本籍ノ管轄廳ニテ之ヲ取立其遞送セシ管轄廳及ヒ道筋管轄廳等へ夫々仕分差送り其各廳ニ於テ繰替候宿村等へ渡方可取計此旨相達候事

(内達) 八年五月廿八日 府縣預人及脱籍無産ノ者復籍并ニ護送ノ囚人等途中賄料ノ儀ニ付追々大藏省達ノ旨モ有之候處自今物價高直難澁ノ趣相聞へ候ニ付今度左之通改定候條自今右ニ

(内達) 乙第六拾八號

府縣預人及脱籍無産ノ者復籍并ニ護送ノ囚人等途中賄料ノ儀ニ付追々大藏省達ノ旨モ有之候處自今物價高直難澁ノ趣相聞へ候ニ付今度左之通改定候條自今右ニ

照準賄方區々不相成様可致此旨相達候事

但本文護衛人ニテ注意可致ハ勿論ニ候得共宿主共ニ於テモ心得違無之様兼テ各管内へ可相達候事

一人ニ付

泊二賄飯米菜代

金十三錢

但臥具點燈費其他手数料共

晝一賄飯米菜代

金五錢

但手数料共

(内達) 八年九月廿五日 乙第貳十三號

昨七年七月中甲第貳拾四號當省布達ノ

内倒死或ハ變死セシモノ若シ所持ノ遺金並ニ品物等有之候ハ、有籍者ハ其家元ニ下付シ無籍者埋葬其他ノ費用ニ供セシ上尙餘贏アラハ地方廳へ爲納窮民救助或ハ病院費用等ノ内へ仕拂其旨可届出事

但品物賣拂<sub>レ</sub>金ニ換<sub>ヘ</sub>費用ニ充ツル如キハ同様相心得事  
 (内達) 八年十一月廿七日 自今府縣旅行病死變死人等原籍不分  
 明ノ者埋葬其他入費ニ可相立分受取方申立候節別紙雛形ノ通  
 各地方時々實地ノ費目ヲ書載シ可差出此旨相達候事  
 但無籍ハ所持ノ遺金等有之節ハ本年當省乙第百二十三號達  
 ノ通可相心得事  
 別紙雛形  
 何年何月何日何府縣下何大區何小區某國某郡何町ニ於テ病死  
 變死倒死 原籍不分明ノ男女并年 埋葬取片付入費區別左ノ通  
 溺死等 何年經費

調査主任  
 官名何ノ誰印  
 一金何程 總計ヲ揭シ

内	譯							
名	稱	員	數	全	員			
藥	價	何	々	幾	何			
送夫賃	甲地ノ死人ヲ乙地へ送付ノ節	何	人					
掲	示	札	壹	枚				
棺	桶	壹	個					
埋葬人	足賃	何	人					
吊	料	何	々					
看守人	賃	何	人					

蠟	何	挺
薪	何	把
筵竹繩等雜費ノ類	何	々

但入費書ハ死者一人宛別々ニ認メ正副一通宛差出スヘシ

○逃亡及失踪人届出方

(達) 六年五月廿八日

第百七十七號

脱籍及ヒ行衛知レサル者家出後三十六ヶ月ヲ踰ヘ永尋中ノモノハ戸籍表總計人員ノ外ニ記載シ又常人

年齡八十歳以上ニ相成候得ハ除籍シ何レモ毎年大藏省へ可届出事

○結縁結婚離婚ノ効

(布告) 六年五月十五日

第百六十二號

夫婦ノ際已ムヲ得サル事故アリテ其婦

離縁ヲ請フト雖モ夫之ヲ肯ンセス之レカタメ數年ノ久ヲ經テ

終ニ嫁期ヲ失ヒ人民自由ノ權利ヲ妨害スルモノ不少候自今右様ノ事件於有之ハ婦ノ父兄弟或ハ親戚ノ内附添直ニ裁判所へ訴出不苦候事

(達) 八年十二月九日

第百九號

婚姻又ハ養子養女ノ取組若クハ其離婚

縁縱令相對熟談ノ上タリヒ雙方ノ戸籍ニ登記セサル内ハ其効ナキ者ト看做スヘク候條右等ノ届方等閑ノ所業無之様精々説諭可致置此旨相達候事

○外國人ト結婚

(布告) 六年三月十四日

第百三號

自今外國人民ト婚姻差許左ノ通規則相

定候條此旨可相心得事  
一日本人外國人ト婚嫁セントスル者ハ日本政府ノ允許ヲ受クヘシ

一外國人ニ嫁シタル日本ノ女ハ日本人タルノ分限ヲ失フヘシ

若シ故アリテ再ヒ日本人タルノ分限ニ復センコト願フ者ハ  
免許ヲ得能フ可シ

一日本人ニ嫁シタル外國ノ女ハ日本ノ國法ニ從ヒ日本人タル  
ノ分限ヲ得ヘシ

一外國ニ嫁スル日本ノ女ハ其身ニ屬シタル者ト雖モ日本ノ不  
動產ヲ所有スルコト許サス但日本ノ國法并日本政府ニテ定  
タル規則ニ違背スルコトナクハ金銀動產ヲ持携スルハ妨ケナ  
シトス

一日本ノ女外國人ヲ婿養子ト爲ス者モ亦日本政府ノ允許ヲ受  
クヘシ

一外國人日本人ノ婿養子トナリタル者ハ日本國法ニ從ヒ日本  
人タルノ分限ヲ得ヘシ

一外國ニ於テ日本人外國人ト婚嫁セントスル者ハ其國或ハ其

近國ニ在留ノ日本公使又ハ領事官ニ願出許可ヲ乞フヘシ公  
使及ヒ領事官ハ裁下ノ上本國政府ヘ届出ヘシ

○女子アルノ寡婦人婿相續及實子女アルモノ他ヨリ養子  
女

(達) 六年一月二十二日  
第二十八號

今般華士族家督相續之義ニ付左之通被

相定候條此旨相達候事

總領ノ男子他ヘ養子ニ遣シ或ハ父ノ心底ニ不應緣故有之者ヘ  
厄介ニ遣シ其家ハ次三男或ハ他人ニテモ當主ノ存奇ヲ以テ相  
續願出候節ハ聞届不苦事

幼少ニテ家督爲致候節ハ親戚又ハ他人ニテモ相當ノ者相選後  
見可爲致事

當主隱居致シ實子又ハ家督相續致シ候上其相續人多病或ハ不  
埒ノ義有之歟又ハ病死致シ最前ノ隱居壯健ニテ再相續願出候

節ハ聞届不苦候事

但再相續人ト可稱事

當主壯年ナレモ疾病其外無據事故有之養子致候處前當主疾病平癒又ハ事故相解候節再家督致シ右養子ハ實家へ立戻リ候歟又ハ當主他へ縁付候共雙方熟談ノ上願出候ハ、聞届不苦事本家分家親戚等ノ内當主病死致シ跡子弟幼年并ニ婦女子弟等ノ御死者ノ遺言又ハ其父母并ニ重立候親戚及ヒ遺妻子熟談ノ上合家出願候ハ、聞届不苦事

父兄伯叔總テ目上ノ者子弟甥等ノ目下ノ家ヲ繼承スルトキハ相續人ト稱シ養子ト稱スヘカラス

當主死去跡嗣子無之婦女子ノミニテ已テ得サル事情アリ養子難致者ハ婦女子ノ相續差許從前ノ給祿可致支給事

右之通候條華族ハ管轄廳ヨリ正院へ相伺士族ハ管轄廳ニ於テ

聞届可申事

(布告) 六年七月廿二日

第貳百六拾三號

本年一月第廿八號布告華士族家督相續

之儀御詮議之次第有之左之通第一章改正并ニ一章追加相成候條此旨華士族へ布告スヘキ事

第一章改正

家督相續ハ必總領ノ男子タルヘシ若シ亡没或ハ癡篤疾等不得止ノ事故アレハ其事實ヲ詳ニシ次男三男又ハ女子ヨリ養子相續願出ツヘシ次男三男又ハ女子無之者ハ血統ノ者ヲ以テ相續願出ツヘシ若シ故ナク順序ヲ越テ相續致ス者ハ相當ノ各可申付事

一章追加

婦女子相續ノ後ニ於テ夫ヲ迎へ又ハ養子致候ハ、直ニ其夫又ハ養子へ相續可相讓事

(達) 九年六月五日 第五拾八號

實子アル者養子ヲ以テ相續人トシ子女アルノ寡婦夫ヲ迎ヘテ前夫ノ跡相續人ト定ムル等ハ一般難差許定規ニ候得共華士族ヲ除クノ外現實極貧或ハ老病等ニテ實子孫アリト雖ヒ幼少ナルカ又ハ有子ノ寡婦タリヒ極貧或ハ其子女幼少且後見スヘキ者モ無之歟ノ場合ニテ親族協議ヲ以テ願出候節不得止事情ニ係ル者ハ地方官限リ聽許不苦此旨相達候事  
(達) 十年十二月廿八日 平民養子相續人等ノ儀ニ付明治九年六月第九拾五號 第五拾八號ヲ以テ相達候處士族ト雖ヒ同様取計不苦候條此旨更ニ相達候事

○棄兒養育

(達) 四年六月廿日 從來棄兒救育ノ儀所預リノ分ハ養育米被下貰受人有之分ハ不被下候處自今預リ貰受ニ不拘棄兒當歲ヨリ十五歳マテ年々米七斗ツ、被下候間實意養育可致事

(達) 六年四月廿五日 第三百三拾八號

棄兒養育米ノ儀平未六月中相達候通十五歳マテ年々米七斗ツ、下渡候處自今滿十三年ヲ限リ被下候條生年月日見定ノ儀ハ其所戶長等立合身体骨格等篤ト檢査シ本年第三拾六號布告ニ照シ年齡相定候様可致事 第三拾六號布告ニ出

(布告) 六年十月十二日 第三百四拾號

本年第三拾八號棄兒養育米云々布告但書取消候條此旨布告候事

(內達) 七年九月九日 乙第五拾六號

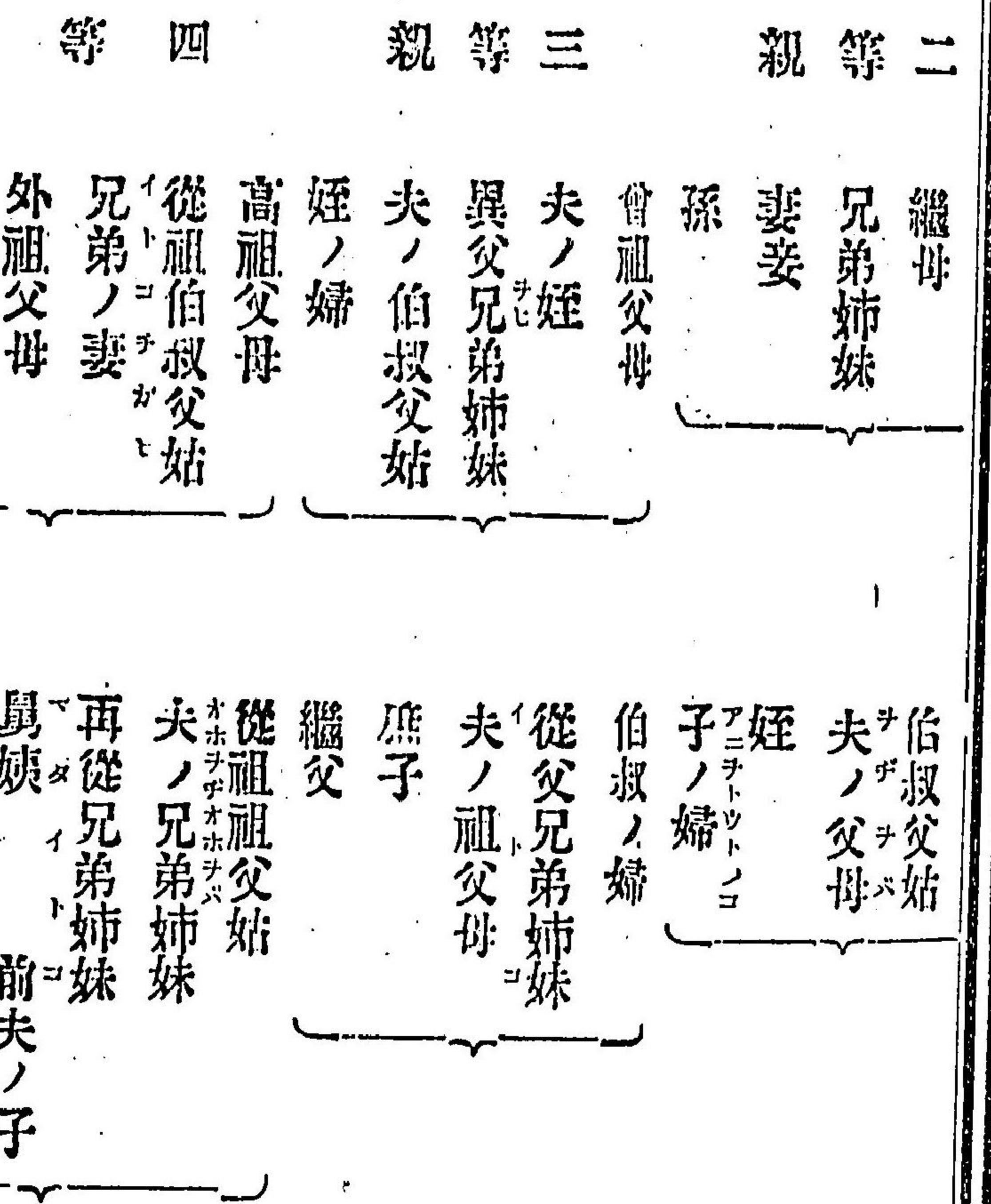
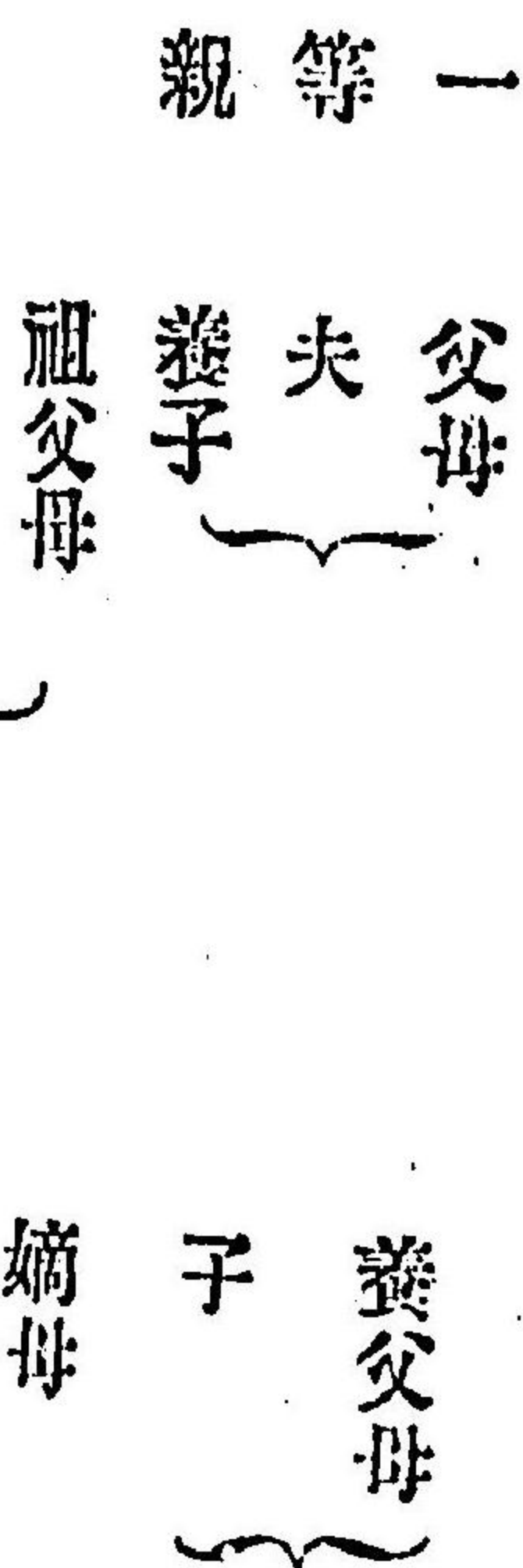
棄兒養育米ノ儀正米無之節ハ貢納石代直段ヲ以代金渡可致旨壬申年大藏省第百四拾五號ヲ以相達候處自今正米無之節ハ其地前月下米平均相場ヲ以渡方可取計此旨相達候事

但本年十月一日ヨリ渡方本條ノ通可相心得事  
(內達) 八年四月二十九日 乙第六拾三號 昨七年十二月中第百六拾貳號公達恤



救米及棄兒養育米等都テ右代金下渡方ノ義各廳ニ於テ本人共  
 一ハ三ヶ月分ヲ取束テ其初月ニ后ノ兩月ヲ括シ渡方可取計且  
 疾病等ニテ日當給米ノ分ハ凡一ヶ月分ヲ本月初ニ操上ケ相渡  
 候儀ハ不苦候條概費ヲ以支給シ最モ本年七月ヨリハ額外常費  
 ヲ以可仕拂此旨相達候事

但本文三ヶ月分取纏相渡候節ハ總テ渡前月ノ下米相場ヲ以  
 石代給與致候且本人病死等ノ節ハ渡過相成候分返納ニ不及  
 候事 第六拾貳號公達ハ  
 雜則ノ部ニ出ツ  
 ○五等親圖



親 兄弟ノ孫

外甥

妻ノ父母

等 舅姨ノ子

親 外孫

從父兄弟ノ子

曾孫 孫ノ婦

姑ノ子

立孫

女婚

從父兄弟姉妹ハ兄弟ノ子相呼テ從父ト爲テ長者ヲ兄ト曰ヒ少者ヲ弟ト曰フ

從祖祖父母姑ハ祖父ノ兄弟姉妹ヲ謂フ

從祖伯叔父姑ハ從祖父ノ子ヲ謂フ即チ父ノ從父兄弟姉妹再從

兄弟姉妹ハ從祖伯叔父ノ子ト謂フ

舅姨ハ母ノ兄弟ヲ舅ト曰ヒ姉妹ヲ姨ト曰フ

○合家禁止

(布告) 九年五月二十日

第七十五號

明治六年一月第二十八號第五項及ヒ同年

八月第三百壹號ヲ以テ合家ノ儀布告候處詮議ノ次第有之自今被禁止候條此旨布告候事

但從前既ニ合家セシ分ハ今後左ノ通可取扱事

一分家セント欲スルモノハ其合家セシ本人ノ一代中ニ限り復

舊スルヲ許ス其子孫ニ至テハ七年第七拾三號布告分家ノ

例ニ據ルヘシ 第七拾三號布告ハ

一 戶籍記載方及ヒ刑律上ノ關涉ニ於テハ戶主ノ血屬ハ等親ニ

依リ其血屬ナキハ等親屬タルヘシ

一 士族平民合家セシモノハ總テ士族ニ編入スヘシ

○男女ノ戶主其家名ヲ廢シ他ヘ入夫或ハ養子女又ハ實家

ニ復籍

(達) 十年八月三十一日

第六拾號

男女ノ戶主

其身養子實子家女他女若クハ相續人タルヲ問ハス其家名ヲ廢シ他ヘ入夫縁付或ハ養子女トナリ又ハ實家ニ復籍等

願出候ハ、地方廳限リ聞届不苦此旨相達候事  
但華族ハ此限ニマラス

○人身賣買書入禁止及奉公人雇期限

(布告) 五年十月二日

第貳百九拾五號 人身ヲ賣買致シ終身又ハ年期ヲ限リ其

主人ノ存意ニ任セ虐使致シ候ハ人倫ニ背キ有マシキ事ニ付古  
來制禁ノ處從來年期奉公等種々ノ名目ヲ以テ奉公住爲致其實  
賣買同様ノ所業ニ至リ以テ外ノ事ニ付自今可爲嚴禁事

一 農工商ノ諸業習熟ノ爲メ弟子奉公爲致候儀ハ勝手ニ候得共  
年限滿七年ニ過ク可カラサル事

但双方和談ヲ以テ更ニ期ヲ延ルハ勝手タルヘキ事

一 平常ノ奉公人ハ一ケ年宛タルヘシ尤奉公取續候者ハ證文可  
相改事

一 娼妓等年季奉公人一切解放可致右ニ付テノ貸借訴訟總テ不

取上候事

(布告) 八年八月十四日

第百貳拾八號 金錢貸借ニ付引當物ト致候ハ賣買又ハ

讓渡ニ可相成物件ニ限リ候ハ勿論ニ候處地方ニ寄リ間ニハ人  
身ヲ書入致候者モ有之哉ノ趣右ハ嚴禁ニ候條此旨布告候事

但期限ヲ定メ工作使役等ノ勞力ヲ以テ負債ヲ償フハ此限ニ  
マラス

○私生ノ子

(布告) 六年一月十八日

第貳拾壹號 妻妾ニ非サル婦女ニシテ分娩スル兒子

ハ一切私生ヲ以テ論シ其婦女ノ引受タルヘキ事

但男子ニヨリ已レノ子ト見留メ候上ハ婦女住所ノ戶長ニ請テ  
免許ヲ得候者ハ其子男子ヲ父トスルヲ可得事

○外國人居留地外住居

(內繕) 九年三月三十日

乙第四十二號 外國人居留地外ニ住居ノ儀ハ是迄雇人

ニ限リ特別許可有之其同姓ノ親戚及外國人婢僕ハ届出ノ上同居爲致差支無之儀ニ候處其他ノ外國人ヲ一時ノ止宿ニ非シテ同居爲致候儀ハ不相成候條人民ノ内外國人ヲ雇入候者ヘモ夫々達方可取計此旨相達候事

○服忌令

父母	五十日忌	嫡孫	三十日忌
養父母	五十日忌	末孫	三十日忌
繼父母	三十日忌	孫女	三十日忌
離別ノ母	五十日忌	曾孫	三十日忌
夫ノ父母	三十日忌	玄孫	三十日忌
嫡母	三十日忌	嫡孫承祖	三十日忌

叔伯父母	二十日忌	甥姪	三十日忌
全母方	三十日忌	從父兄弟姉妹	三十日忌
夫	三十日忌	高祖父母	三十日忌
妻	三十日忌	全母方	遠慮一日
兄弟姉妹	二十日忌	異母同シ曾祖父母	二十日忌
全異父	二十日忌	同母方	遠慮一日
嫡子	二十日忌	祖父母	三十日忌
末子	三十日忌	全母方	百五十日忌
女子	三十日忌	離別祖母	二十日忌
養子	二十日忌	妾忌服ナシ	九日遠慮